

降り続いた雨が夕方になってあがった。やさしい風がはいってくる。薄雲の端が夕焼けに色づいていた。キッチンのお窓に並べたトレーで、人参と大根のヘタが順調に育っている。柔らかな葉はもうじき葉味にできそうだ。

雲が流れている。これで関西の梅雨も明けるのだろうか。トレーに薄く水を張りなおし、スパイスの小瓶が並ぶケースの曇りを布巾で拭いた。マグカップ一杯分のお湯が沸いた。フィルターペーパーの粉に湯を落としながら思う。

姉の寧子は、雨の日に出かけるのをきらう私が、長雨を言いわけにぐずぐずと行動を先延ばしにするのを見越し、梅雨明け間近な日を狙って、私のパソコンに長文の文章をよこしたのかもしれない。妹を追い立てる作戦だ。

立ったままコーヒーを一口飲んだ。藍色に落ちてきた空に、夕焼けが、黒のままざったオレンジ色になって残っている。振り向くと、キッチンのテーブルの上は薄暗くなっていた。

明かりをつけた。プリントアウトした紙が散らかっている。午後から置きっぱなしのスマートフォンに、姉からの返信はない。椅子に掛けテーブルに肘をつき、何度目かのショートメールを送った。「その案件目下検討中」。しばらく画面を眺めて待ったが、やはり返信はこない。どこににいるのだろうか。

今日は仕事のない木曜日だ。夫を送り出し午前中に家事を終え、昼食の前にパソコンを開けてみると、姉から添付文書のみメールが届いていた。発信時刻は午前四時過ぎになっている。これって夜更かしなのか、それとも早起きすることかしら。姉に早起きの習慣があるとは思えない。

画面をざっと読み終え、腕組みをしたまま文字の連なりをしばらく眺めていた。内容が突飛で頭に入っていないが、なにかしらの決断を迫られているのは理解できた。

明け方までかかって書いた姉の魂胆を考えた。仕事休みの日に妹に読ませるためだ。今日の休日を充分に使ってじっくりと内容を検討し、混乱した気持ちを立て直し、よりよい選択を、自分の意思でしたと妹自身が思うように。間違っても、姉に嵌められたなんぞと勘違いせぬようにと。

私は三人きょうだいの末っ子で、姉の寧子とは六歳離れている。姉の上に周という年子の兄がいた。父はアマネ、ネイコ、ニコ、と名付けたのだが、兄と姉はたいいてい読み違えられた。仁子はまずまずの割合で読んでもらえた。

兄を呼ぶときは姉に習ってアマネくんと言い、姉をネイコねえちやん、ねいねいと呼んだ。ねいねいの髪は茶味がかった猫っ毛で、柔らかなウェーブがかかっている。その髪に触れるのが好きな妹は、物心がつく前から手を伸ばしては嫌がられていたらしい。話によると、父方の祖母の男兄弟にひとりそんな人がいたという。

私たちは、五歳になると母から電車の乗り方を習った。高校までの一貫校になっている三駅先の幼稚園に通うためだ。私は、六年生の姉に付き添われ通園した。姉は園舎の前の跨道橋を渡ると振り返って手を振り、小学校の学舎に向かった。

一緒に通ったのは夏休み前までだったが、家の外でみる姉が、すつきりした立ち姿でおとなびて見えることに、あるとき気づいた。私服でいると中学生に見られ、高校生に間違われることもあった。私は子供心に、姉がかわいく見えるのは、あの髪が素敵だからだと思っていた。

洗いっぱなしでも格好がついておしやれにみえる姉に「ねいねいはいいなあ」と直毛で毛量の多い漆黒の髪を嘆く妹が言う。すると事もなげに返される。「そんなのパーマかけてカラーすればいいの。あんたのはどんなにでもなるけれど、わたしはまっすぐにならないんだから」と手櫛を入れて整える。「おねえさんかわいいねって角のおうちのおばさんが言うの。こないだもさあ、電車でね、おっきな男子に、おまえ貝沢の妹かってきかれた」

姉はふんつと鼻先で笑う。「しょうもない鼻たれに寄ってこれられても迷惑千万」

姉の目は切れ長で途中から二重になっている。私は二重のきよろんとした目。それなのに二人並ぶと、あら、妹さんね、と人に言われる。肌の色、細い顎と顎が似ているので姉妹っぽいと言うのが大方の見立てだった。兄はどうだったろうか。もう思い出せない。

姉は私が生まれる前からピアノを弾いていた。ピアノは、隣の家に漏れる音を抑えたいという母の配慮から、両親が寝室にしている玄関脇の部屋に置かれていた。

自在にはいえないけれど、お喋りができるようになった妹は、姉の練習を聴きつけると、絵本やお気に入りのおもちゃをもって玄関の上がり框を陣取る。練習のたいいは短いフレーズの繰り返しばかりだ。曲のていを成さない。旋律の途中でつかかかっては、また弾きなおす。つかかきりも含めて覚えてしまった妹は、練習をすませ、居間で寛ぐ姉がいるのにも構わず、小首を傾げて鼻歌にしよう。すると姉はさほど不快そうでもなく「いやみなあかんぼだ」と言った。

よどみなく弾き通せるようになると、妹は舌つ足らずの調子で、完成したフレーズをハミングした。姉は満更でもなさそうな表情でその間違いを指摘する。「そのリズム、もつと鋭く。スキップ、スキップだよ。ちゃんと歌ってよ」と口を尖らせた。

五年生になった姉は、学芸会で合唱の伴奏をし、校歌斉唱でもピアノを弾いた。母について学校に行く度に見られるグラランドピアノを弾く姿は、私の自慢でもあった。

ふわ髪の垢抜けした長身の少女は、音楽大学の付属高校に進学するまで、ピアノが上手できれいな目立つ生徒として、いつも誰かの目に留まっていた。

おとなになった姉は、電話を受けるのもメールの返信も、面倒く

さい、が先にたつ人になった。

その姉から、奏者名、時間、場所、料金のみのショートメールが届くようになったのは、私が結婚してからだった。ほぼ三か月間隔で届く演目は、クラシック全般はもとより、鳴り物すべてから選んでいるのかと思えるほど多彩で、その選択に外れはなかった。私は「了解」とだけ返信した。

短期大学のピアノ科を卒業し、結婚してからも楽器店の音楽教室で講師をしている私にとって、姉からの誘いは、仕事先と家との往復ばかりで過ぎる生活に織り込まれる、きらめきだった。

姉は会場にいつも一人で来た。むろん私もだ。終わっても食事はおろかお茶を飲むこともしないで別れる。だから妹の五年の結婚生活が二年前から破綻に向かっていることは、知らないはずだった。この添付メールを読むまで、私はそう思っていた。

私は姉に私的なことは訊かない。住所も、パートナーが今もいるのかも知らない。関心がないのではない。妹だからというだけで、姉の領域に踏み込むわけにはいかなかったからだ。困ったことが起きて、具体的な場面で必要なが妹なら、本人かだれかが連絡をよこすはずだ。

演奏会で会うたびに、姉の外見には目を見張らされた。全体をどうイメージするのかわからないが、先行するのは、手懐けるのに苦労する髪だと、私は思っている。髪の色と形を変え、それに合わせて化粧も着るものも変える。

初めて誘ってくれたのは真冬だった。金髪のベリーショート、黒

のタートルネックに片側だけスリットの入った細身の長いタイトスカート。長身に映えていた。

一度きりだったが、ストレッチパーマが流行したころ、前髪をおろした裾広がりのおかっぱ頭できた。隣に並んで座った私が横目でこっそり見ると、肩を抜いたニットから色白の細い首が伸び、そこに乗った黒い髪は、心もち膨れて縮れていた。

三か月に一度会うたびに、私は姉の肌を盗み見て化粧ののりをチェックし、身のこなしに疲れはないか、私と同じ大きな掌が傷んでいないかとこっそり窺い、元気そうに見えると、ねえねえ、だいじようぶなんだ、と得心する。

何度か回を重ねた夜のことだ。季節は覚えていない。チェロのアンコール演奏も終わり、会場が明るくなった。通路側にいた姉が先に座席から立ち上がりかけた。俯いた横顔に、一瞬細く影がさす。頬がこころもち削げ、陰影の濃くなった顔は美しかった。私は胸を突かれ、中腰で姉をじっと見上げた。姉は、なあに？ という笑った目を向け、席を立った。

別れ際に先に行く姉が振り返りもせず言った。「ニコ、なにがあってもご飯食べるのよ」それは自身に向けて言っているように聞こえた。私が二十五歳で結婚したのをきりに、あんたと呼ぶのをやめ、名前と呼びかける姉。その後ろ姿を見送りながら、姉にとっても辛いことが起きたのだと、私は確信した。

それと同時に思った。ああやっぱりそうだったんだ。私たちはこんなふうに着て、顔を見て、お互いの安否確認をしているのだと。

私たちは、大切なだれかの死は、突然起こりうることなのだ、知ってしまった。その経験を共有できる相手は、姉にとつても、いまや妹しかないのだと。だから安否だけは確認していたのだと。

姉妹の間で暗黙の裡に了解されている漠とした死の不安は、中学一年生の兄が逝った一月の寒い朝に起因している。

六歳になったばかりの私は、姉と共有する部屋でベッドを並べて眠っていた。突き上げる衝撃でもんどりうち、目覚めた。目の前はまた暗い。無数の鉄の棒の束が繰り返し床下から襲撃してくる。私を狙い撃ちしている。起き上がれない。

家がゆっくりと横に振れ、柱が軋んだ。「地震」と隣のベッドの姉が秘密を口にするみたいなのさ。囁き声で言い「服着て、はやく」と声を荒げた。私はベッドサイドの籠から衣類をとり、パジャマを脱ぎうとした。声がとんできた。「ばかね、机の下にもぐって着るのよ」両親から送られた学習机まで這っていった。椅子は滑っていったのか無い。難なく潜り込めた。あちこちをぶつけ、シャツやズボンと格闘しながら、へいきよ、と繰り返した。

父の声が近づき扉が押し開けられた。「おまえたちい、だいじょうぶだぞお、ゆっくり出ておいで。ガラスあるかもしれないから、スリッパ履いてこいよ」

のんびりを装った父の声が、今起きていることは何でもない事だと言っているようだった。もう揺れても怖くない。姉の影が立ち上がった。私はベッドの下を足で探って、スリッパを履いた。

「戸お、閉めんじゃないぞ、あかなくなったら困るからなあ」

間延びした調子に母の声が重なった。畳みかけるように兄の名前を鋭く呼んでいる。ひとことふたこと両親の遣り取りが聞こえ、力任せに兄の部屋の扉を押す音がした。父が大きく息を吸うのが分かった。「ああー」と太く叫び、母の金切り声があがった。私は縮み上がった。姉が暗がりに腕を伸ばし、兄の部屋へ進もうとする。その体に、闇雲にしがみついた。「行っちゃだめ」。父が扉の際に立ち、私たちの前を塞いだ。「来るな、ニコを連れて庭に出てろ」

それからの記憶は、声や音の断片の寄せ集めでしか辿れない。隣の家の庭さきで、助けを懇願する呂律の回らない父。家の中で、たすけてくださいと繰り返す母。その声は、踏み込んできた近所の私たちの口ぐちの声と共に、家に吸い込まれ、黙ってしまった。

私は庭の隅で、それらを背に、目の先の家並みを見つめていた。どの家も白んだ空を背景に、家族を抱えて眠りこけている。背後で起きていることと地続きのはずなのに、どうしてこんなに静かで見られるんだろう。背後で起こっていることは、嘘かもしれない。でも足元でしゃがんで、体を震わせているのは姉だ。

静けさを裂いてくれたのは、現れた体格のよい白髪のおじさんの足音だった。

「寒いかな、うち行こ。ついそこや。救急車がじきにくる。あんたらはここにいたら、邪魔なる」。中腰になって姉の顔を覗き込み声を落とす。「な、あんた、おねえちゃんやろ、妹連れて行ったらな、な」私が腕をとると姉は立ち上がった。

車が止まったのは、路地を二つ越えてすぐの二階家だった。この家なら知っていた。屋根のある門構えに表札。その下に木札が掛かっている。目で問いかける私に、「岩尾さん。自治会長さん」と姉が掠れた声で答えた。おじさんは、格子戸越しに玄関に声をかけると、車に戻りどこかへ行ってしまった。

踏み石伝いに出てきた、ひつつめに髪を結った小柄なおじさんは、私たちを奥の部屋に招き入れ、電気ストーブの前に座らせた。

「ご飯するよって、待っときや」

おばさんが朝ごはんの支度をしている間も、横揺れは何度もきた。その都度おばさんは隣の台所から声をかけてくれた。「大丈夫、その部屋は耐震ルームやから、家は潰れてもこの部屋は残るからね」と言って、窓、床、柱、床下と構造を説明してくれた。おばさんは三歳の時に大きな地震にあったので、安心のために、リフォームのついでに工事をしたのだが、「お守りのつもりやったのに、役に立つ日が来るなんて」としきりに嘆いた。

夕方になって、姉の制服と、私の白のブラウスに紺のギャザースカートと二人の靴が届き、おばさんの口から兄の死が伝えられた。着替えた私と姉は、帰ってきたおじさんの車で、おばさんと一緒に、駅前の葬儀会館へ行った。会館の畳の部屋に案内され、座っていた父と母を見つけ、ほっとして駆け寄ろうとしたとき、大きな揺れがきた。

きゅんとまわりで声があがったが、手の届くところに支えはなかった。姉が後ろから私を羽交い絞めにした。私は姉の薄い腹と胸に

押さえつけられ、背中を丸めた。私たちは、ひとかたまりの四本足になって支えあいながら、しばらく揺れた。揺れが増幅しないのを確認すると、姉は腕を私の頸に巻きなおし、布団で休む兄のところまで引き摺った。履物が散らばり、首が締まって涙が出た。

兄の葬儀をすすめられたのは、自治会長のおじさんが手配をしてくれたことと、遠く離れた激震地から、葬儀の問合せが殺到する前の、隙間のような時間に潜り込めたからだだった。

四月になって、私は小学生になり姉は兄が通っていた中学校に進学したが、学習塾を休職している母に復職する兆しはなかった。出不精になって、お使いを言いつけられる回数が増えた。そのうちに夕食の支度をしている途中で、突然エプロンをつけたまま椅子にへたり込み、食卓に突っ伏すことが度重なった。はじめのうちは、そばに行つて母の手に私の手を重ねると、上体を起こしてゆるゆると立ち上がってくれていたが、あるとき手加減のない力で握り返され振り払われた。腕が肩から抜け落ち、掌が潰れてミンチになったかと思つた。見ると、母の爪のあとが、手首に深く入っている。拒まれたと全身でおもつた。羞恥心が体を貫いた。私ではなかったのだ。それからは、母が突っ伏すと怖くなり、姉と共有している勉強部屋に隠れた。

激震地から遠く離れたこの市内で、家屋の被害は多くあったが火災は免れた。死者は兄一人だった。だいたつてから、新聞の全面に細かな文字で、市ごとの死者の名前が掲載されたが、私たちが住

む市の欄には「貝沢周」とあるだけだった。

兄の死因は、和ダンスによる圧死だった。二段組みの和ダンスの上段が、離れたベッドまで跳んだのだ。下段は前方に滑っていたが、横転はしていなかった。本棚そのままでも、本も飛び出していなかったという。兄の部屋と背中合わせの台所は、たおれた食器棚やガラス片で入れなかったが、ほかの部屋はそれほど荒れていなかった。

家には以前にもまして帰りが遅い父と、いつも気怠そうな母がいる。姉は陰気な顔でひたすらピアノを弾いていた。指はよくまわっているが、ハンマーで弦を叩いているだけの音の連打にしか聴こえない。拒みたくても音を拾ってしまう私の耳は、辛がっていた。

それなのに、私が居間のテレビの音量を上げ、ソファーに掛けて観ていると、休憩にきた姉は隣にどさりと座り、衝撃で転びそうになった妹の非難の目に頓着もせず、リモコンに手をのびしチャンネルを替える。面白い場面では画面に向かってにっと笑い、番組がすむとつと立って行く。私を相手にしてくれる家族はいなかった。しかし拷問のようなハンマー音から解放される日が突然きた。音楽高校への進学を希望していた姉が、ピアノ科の学生や受験生を中心に教える多野先生の自宅のレッスン生になったその日だった。受験をするなら紹介をします、とそれまで習っていた先生から紹介された先生だった。母は身じまいをして私に留守番を言いつけ、姉と連れ立って先生の家に行った。

帰ってきた姉は音階の練習を始めた。ゆっくりと。へえっ、と思

った。ただスケールを繰り返しているだけなのに、私には姉が歌っているように聞こえた。

毎週土曜日、多野先生のレッスンから帰った姉は、自分のピアノに直行した。聴こえてくるのは、きのう弾いていた曲に違いないのだが、別の人の演奏みたいだった。音の輪郭がまるで違うのだ。音色が変わるにつれ、家の中でのちよっとした瞬間の姉の表情にも、柔らかさが戻ってきた。先生が乗り移っちゃった。私はそう思った。姉により良い音をつくるすべてを教えてください、人格を快復させてくれる多野先生ってすごい。私は先生に、つよく憧れた。

しかし、家族が兄のことを口にしないのは変わらなかった。兄は祭壇の数葉の写真に閉じ込められていた。まるで早逝するのが生まれる前から決まっていたかのように、死を受け入れるなんて。私は兄の話がしたかった。そうすれば、飄飄として兄はどこかで生きていられるのに。

そんな気持ちに風穴を開けてくれたのは、自治会長の家のおばさんだった。訪ねるきっかけになったのは、入院したおじさんのお見舞いに桃を届けるお使いだった。

横並びの桃が傷つかないように、両手で下から箱を支え胸で抱えて歩いた。裏道を通って庭に出るのが近道だった。木戸を押し開け、「ごめんください」と繰り返した。庭は広く、二階まで届く桜の木が繁っていた。

「どなた」と返事があった。縁側から迎えてくれたおばさんは、母

とひと廻り違うだけなのに、髪が白くなり半年余りのうちにすっかり老け込んでいた。

私は招き入れられ、アイスクリームをご馳走になった。濡れ縁に並んで腰を掛けた。おばさんは手もとのスプーンをそつとアイスクリームに差し入れる。そこから溶けて柔らかくなるのを待って口に運ぶ。冷たい塊のまま口に放り込み、先に食べ終えた私は、体育座りの膝に顎をのせ、帰るタイミングを計っていた。

鬱蒼とした濃い緑が頭上を覆っている。地面を見ると、桜が縦横に根を張り、あちこちが持ち上がり、でこぼこしている。盛り上がった根の際に、親指と人差し指で小さく丸を置いたような穴があった。縁が磨かれたようにつるりとして堅そうだ。深さは分からないが、掘り出した土の盛り上がりはない。じっと見ているとおばさんが言った。

「あれか、あれは蟬の幼虫が出てきたあとや、ほれ見てみい」

節くれだつた指がさす木の幹に、蟬の抜け殻がくつついている。幹を辿ってみると、幾つもあった。

「セミ？」

「まだ時期が早いんやけど、天気のエエ日が続くと毎年、何匹か出てくるなあ」

「あわてんぼさん？」

「そうやな。夏休みになるとな、あんたの兄さんと姉さん、近所の子供らも一緒になって、虫取り網持って、よう来てたで。木戸さきで、お邪魔しますというて挨拶してくれるんやけど。セミはじきに

死ぬんやから捕ったらあかんで言うとな、あとで返しに来ますて返事すんねん。どないやしらんとおもうてると、夕方になって、ちっさい女の子に、虫かごに詰めたセミを放しに来させた。年少さんかって聞いたら、幼稚園行ってへん、って言うてた。あのちっさい女の子は、あんたやったのやね」

四歳の夏のことだろう。そんなこともあった気がするが忘れていく。きつと兄と姉から、だいたいな任務だとか言われて来たのだろう。見上げて、「うん」と言うのをみとめると、おばさんは鼻をぐすと鳴らした。

「ほんまに仲のエエ子おらやった。てつきり双子やと思うてたよ」おばあさんは目をしょぼつかせていた。兄のために涙を流してくれている。兄のことを話せる人が、こんな身近なところにいることに驚いた。私は涙を流すおばさんの背中をそつと撫でた。

「おおきになあ。あんたは優しい子や。おばちゃんの友だちもな、あんどき死んでたんや。火いに巻かれてな。長い付き合いのものに先立たれると、堪えてかなわん」

「死んだの」

「ああ、死んではつたんや」

「火いに巻かれて？」

「ごめんな、怖い言い方になってしもた」

家に戻ると母がいた。

「お使いありがとう。おばさん、お元気だった？」

どう説明しようかと思うより先に言葉が衝いて出た。

「おばあさんになってた。髪の毛、白くって。友達が火いに巻かれて死んではったって、泣いてた」

母が私を見た。「お友達が亡くなられたのね」

「ちがう、火いに巻かれて死んではったの」

「だから」

「死んではったの。火いに巻かれて。亡くなったのちがう」母が何か言いかけたのを私は制した。

「どうしてわたしには近所に友達がいないの。アマネくんは野球の男子と遊んでたし、ねいねいも混ざってた。わたしにはずっとだれもない。わたしはコーリツの学校に行きたかった」

方言で喋ると母に言い直させられることなど、支離滅裂になりながら、不満をぶちまけて、部屋に戻ったのを覚えている。そのことを姉は知らないが、私が母に刃向かった最初だったと記憶している。次の週もおばさんの家に行った。おばさんは友のことを語り、私は兄と姉の話をして、学校の友達の話をした。おばさんは、「約束して、親に許しもらうて、電車に乗って行かんと会われへん友達いうのんも、大層なことやな」と私に話しを合わせてくれた。おばさんの庭は、私がぶらりと遊びに行けるたった一つの場所だった。

夏休み前の短縮授業に入り、一年生はお弁当を食べたあと掃除をして家に帰された。水筒がカラになっていた。友達と別れて電車を降りた私は、喉の乾きを我慢しながら家に向かった。玄関の鍵穴に鍵を差し入れると、カチャンといって掛かってしまった。玄関ドア

は開いていたのだ。父の黒い靴があった。家の中はしんとしている。

「とうさん、いるの？」廊下から首を伸ばすと、居間が見通せた。

ソファに腰かけ、頸を前に折った父の頭頂部が見えた。眠っているようだった。私はすり足で寄って行って前に立った。腕組みをして居眠りしていた父が小突かれたように顔をあげ、私をみとめると、「ああっ」と照れたように小さく言った。「寝てしまったね」

ネクタイが緩んでいる。顔の色が薄汚れている。父から目を外さず、ランドセルをおろし、次の言葉を待った。背中から汗が引く。くっついていたTシャツとキャミソールが体から離れた。

「かあさん、ぼんやりしていてバイクにぶつかったんだ。入院させた。いや大丈夫、怪我はたいしたことないから」

私は生唾をのんだ。とうとうだと思った。動悸をかくそうと、返事をせざるりと背を向け、冷蔵庫に立つて行った。麦茶が干からびた喉に詰まって、むせた。

「おねえちゃんが帰ったら、晩御飯は外で食べよう」

父はネクタイを外しながら「ファミレスがいいか」と言った。ファミレスなんて、幼稚な子供の機嫌をとっているみたいだ。姉にならどこへ行きたいか聞くはずだ。父がよれよれなのが私の不安を煽った。父に麦茶のコップを手渡し、挑むように言った。

「ファミレスでもいいけど、とうさん、なんか、汗くっさいよ。シヤワーつかってよ」

「そうかあ、ごめん、着替えてからちよっと仕事するわ。ネイコが帰ったら声かけてくれ」

父は麦茶を一気に飲みコップを私に返した。浴室に入るのを見届けて、邪険な声で追い打ちをかけた。

「クーラー寒すぎ、切るよ」

むかつ腹がたっていた。母の事故が兄の死の延長線にあることは、子供でもわかる。それがぼんやりだなんて。誤魔化されている気がした。

家じゅうの窓という窓を開けて回った。けれど勢いはおさまらず、あの冬の日以来、閉じられている兄の部屋のドアを開けた。まず机が目に入った。窓に寄せられた机の上は整えられている。

締め切られて籠った熱い空気のかたまりが、入ろうとする私を押し戻す。足元がくらくらとした。私は踏ん張ってから一歩進んだ。勝手に入った妹に姉は怒るだろうが、かまわない。私は来るべき姉の叱責を、受けて立つつもりになっていた。

兄の勉強机に寄りかかり、胸高の窓のカーテンと窓と網戸を開放した。隣の家の玄関先が見通せた。てっぺんが見えない大きな木が繁っている。普段と違った方向から見える景色が、新鮮だった。風の時刻になっていた。蝉も鳴きやんだ。私は汗を流しながらじつと姉を待った。

突然、カナカナが鳴き始めた。カナカナは一匹で鳴いている。私の耳孔で甲高い音が飛び跳ねる。うしろで声が出た。

「お隣のあの大きなのは、くぬぎの木なの。どんぐりよ。カナカナはドングリの木でしか生まれないの。アマネくんの情報よ」

声の主は、ドアの際に立つ制服の姉だった。私に構わず姉は部屋

に入ってきた。「蚊が入るじゃないの」と言いながら網戸を閉めた。

「ニコ、この家では、これからもう、子供ではいられないよ」

本気の声だ。上目づかいで姉をみながら、頷き「はい」と言った。

幼稚園児時代はすんで、小学生になった自覚をもつてことか。それなら担任の先生が、クラスみんなにいつも言うことだ。先生ならそのあとに、責任とか、お行儀とか、お弁当を残さないとか注意するのだが、姉が続けたのは、姉妹の部屋を出て、この兄の部屋を使うようにということだった。

「かあさんには私から言っておく」

私は嬉しかった。姉の口から兄の名前が出たのだ。これからはおばさんと話すみたいに、アマネくんの話ができる。顔が綻ぶのがわかった。私の心は上ずっていた。

私たちは父の水色の車でファミレスに行った。車中でも食事をする間も、誰も話さなかった。テーブルの皿が下げられ、デザートを待つ間に、姉が口を開いた。

「とうさん、わたしに説明したかあさんの事故のこと、ニコにも話してやって」

赤信号の横断歩道に母が出ていき、見通しの悪い四つ角を曲がってきたバイクが接触して、軽い怪我をした。救急病院の先生から最近の母の様子を訊かれた。先生から精神科の受診を打診された。父は話し終えると心配そうに私を見た。

ふんふん、と私は頷き、運ばれてきたチョコレート。パフェにスプーンをいれた。

「まえから、かあさん変なの、知ってるよ」今になって、あなたたちに教えられないいわれはない。「だってそうでしょ、わたしがうちで一番長くかあさんといってるんだもの」

父と姉が私を注視している。彼らの目は、ニコは家族の中で最も保護されるべき末っ子の役回りだといっている。煩わしい眼だ。

「ピアノ、ならわせてくれる？」

私はチョコレートパフェのクリームの表面を、細長いスプーンでかき混ぜ続けながら、頭に浮かんだことを、言った。

二人はきよんとした表情でいる。父が取り繕うように応える。

「ああ、そろそろ時期だな。日曜日に手続きに行こう。駅前教室がいいだろ、ネイコが習ってたところ」

「いいのよ。あした自分で行ってくるから」

父が姉を窺っている。私は目の端でそれを見据え、続けた。

「それでね、アマネくんの部屋に引越すからさ、机運ぶの手伝って。ねえねえとは話がついてんの」私はもうふたりの顔色なんか見なかった。「それから、ねえねえ、このごろのピアノ、雑じゃないの。毎日聴いてると、ほんといやんなっちゃう」

うちの中で言う勇氣はなかった。外でなら、姉の怒りの嵐を凌げる気がした。姉が、息をぐっと堪える喉音があった。相当怒っているが、ふーっと息をついてから出てきた答えはちがった。

「そうなのよ、ペダルが難しい。あんた、さすがよく聴いているわね」

私はスプーンを止めて、上目づかいに姉をみた。眉間に立て皺が

寄っている。やつぱり怒っている。テーブルの上を手がつかいと延びてきて、私のチョコレートパフェのソーサーに届いた。

「溶けてるじゃないの、かしてみな」

崩れかけたアイスクリームから、桃とミカンを選びだし、ソーサーに置き私の前に戻した。

父の目には、姉妹が衝突を回避したと映ったらしい。ほっとしたように足を組み直し、コーヒーに手をのばす。姉が注文したバナナアイスが置かれた。がっちりした指がアイスクリームに刺さったウエハースをすつと抜き取り、口に入れた。私はゆったりとコーヒーを飲む父に、すこし苛立った。

翌日、学校から戻ると姉が先に帰っていた。「先生ならだれでもいいってもんじゃないのよ」と言い、私を連れて音楽教室に行った。受付で、姉が習っていた先生のレッスンに、組み込んでもらった。

「頼らない妹なので」と保護者の口調で言う。家で復習できるように、レッスンの度に内容を録音させてもらえるよう頼んでくれた。

「妹は一晚寝ると、なんでもすっかり忘れる子供なんです」

受付の女の人はにこりとして私を見た。

父に貰ったお小遣いがあるからと姉が言うので、私たちは晩御飯に、教室の並びの喫茶店で定食を食べた。はじめての姉と二人きりの外食だった。

「アマネくんがいつしよだったらなに食べるかなあ」

「そりゃ、カレーでしょう。それとクリームソーダ」

私たちは、目を見合わせて、笑みを浮かべた。

「ご飯のお皿と別に、カレーがよそ行きの入れ物に入って出てくるやつね」

「それだったら、次のアマネくんの誕生日プレゼントは、カレー用の器にしましょうか」私は母のちよつと高い声色を真似た。「つてかあさんが言ったりしてたね」

姉がうつむき加減で言う。

「実現しなかったわね」

「でもさ、きつとゲームとかの方が喜んだとおもうよ」

私は努めて明るいふうを装って返す。姉は顔を上げなかった。皿に残ったご飯を箸で片側にまとめていた。

両親と姉が兄の死を受け入れ、兄をそれぞれの胸の裡に棲まわせる日まで、私がすべきことは、兄の部屋を空き部屋にせず、部屋から家族の体温を消さないこと。それができるのは、私だけだった。

翌週から夏休みに入った。姉は私を、母の入院中限定の掃除係に任命した。日曜日には、父と三人で水色の車に乗って母を見舞い、帰りにデパートの食料品売り場で買い物をした。加熱すればできる食品と、サラダ用の野菜にパン。果物。父は、レトルトの品数の多さに驚きを連発し、やつぱりデパートは置いてるものが違うわ、感動もんだな、と繰り返した。

八月に入り、兄の部屋への引っ越しも完了し、私は新しいレッスンカバンに父が買ってくれた小さな録音機を入れて通った。

母が退院するまでのあいだ、姉と私は、何かにこじつけては兄の

話をした。新発売のスナック菓子をみつけると、兄なら、どんなコメントでこの菓子を紹介するだろうか、と二人で考えたりした。

兄を間に過ぎた姉との夏休みは、兄を弔うための限定された時間だった。私の足は自然におばさんの庭から遠のいていった。

九月になって母が退院した。その日の食卓には、退院祝いの寿司桶が並んだ。母の声の調子が少し高くなっていった。その声で言ったのは、来週から学習塾に復職することだった。そしてこれまでは受けずにきた土曜日にも講義を持ち収入を上げ、音楽高校に進学希望の長女のために、グランドピアノを置ける防音の部屋を増築するのだと言った。

「ピアノは？」と私はきいた。

「新品は無理だけど、中古なら買えるわ。」

「じゃ、今のピアノ、わたしにちょうだい」と調子に乗って言う私は、母親に媚びる小賢しい末っ子だった。

「だからねえ、ニコ。土曜日のかあさんは、帰りが遅くなるの。これから日も短くなるでしょ。子供一人の留守番は心配なのよ。だからね、多野先生のお稽古に、ついていきなさい。お姉ちゃんと一緒なら心配ないわ」

「ほんと？」実物の多野先生に会える。私はとろける気分だった。

姉が苦苦しげに口を開く。

「わたしそんな先のこと知らないし、かあさんつて、なに言ってるんだか。妹を連れて行くなんて、恥ずかしいでしょ」

母は構わずに続ける。

「防音のレッスン室なのよ。外から気兼ねなく生徒さんが入れるように、専用の玄関をつけましょ。ピアノ教室って書いた玄関よ。お手洗いもいるわね。あなたのおねえちゃんは教室の先生よ。すごいじゃない、いいわねえ、ニコちゃん」

姉は黙って箸を置き、居間に移った。怒りで顔が白くなっている。

父は「ごちそうさん」と言って立ち上がり、姉のそばに立って肩をたたき、自分のパソコンを置いてある小部屋に連れて行った。

私は皆の食器を流しにまとめ、兄の部屋にこそそと戻った。しばらくして、姉がコンと一回ドアをノックして入ってきた。部屋の隅に移した兄の椅子にぶらっと掛けた。

私が部屋を移してから、時どきやってきて数分そうすることはあった。しばらくして黙って出て行く。柔軟体操をしたり、座禅を組んだりもしたが、いずれにせよ終始無言だ。その日はちがった。

「ピアノ、ほしい？」珍しく口を開く。私は母親の機嫌をとった後ろめたさもあり、姉に向き合い、膝を揃えて椅子に掛け直した。

「かあさんの計画に乗らなくていいけど、受け止めてあげてって、とうさんに言われた」姉は立ち上がって私を見降ろした。「その時は、アップライトは晴れてあんた専用ね」

姉は母の決定を拒めない。グラランドピアノは必要だった。一方的に練り上げた計画の押しつけが不愉快なのは、私にも伝わっている。

多野先生のレッスン付き添いは現実になった。先生にも了解をとったという母に、姉は妥協せざるを得なかった。

姉から注意事項を並べたてられた。例えば挨拶、しずかにすること、きちんと座って目を泳がせない。当たり前と思えることばかりだった。「要するに、レッスン室の隅っこの、つままない埃くらいの存在でいるのよ」と言った。ソンザイ？ 具体的にどうすればよいか分からず、私は姉に習って、レッスンの前の夜に爪を摘んだ。

その日、新しいソックスに外出用の白いサンダルを履き、ハンカチとポケットティッシュをいれたポシェットと水筒を斜め掛けにし、フリルのついた帽子を被って、そっけない姉について電車に乗った。家を出てから一時間ほどで着いた駅でトイレを使い、十分ほど歩いて先生の家玄関先に立った。

先生の家は二階建てで、大人の背丈を越す生垣に囲まれていた。玄関を上がってすぐの部屋に、グラランドピアノが二台置かれていた。二台のグラランドピアノは、圧巻だった。先生に挨拶をソファアの端に掛けた私は、姉に言われるまでもなく、綿ぼこりみたいに軽い存在でいた。

次の週に行くと、ソファアの前のローテーブルにゼリーの乗った皿があった。キャンディーのように、一個ずつ色違いのセロファンを持ちを引いたのは、その下の白くて薄い磁器の皿だった。指で弾いたら、きつと澄んだ音色がするだろうと思うと、目が離せなくなつた。姉に見つかつたら、物欲しげに見ていたとこっぴどく叱られる。私は皿に触れたい気持ちを抑え、レッスンの進行をみていた。

エチュードの楽譜が閉じられ、次の曲に進む。先生は姉のそばに立って譜面に注意事項を鉛筆で書き込み、短いフレーズを片手で弾いて姉に教える。何度かそれが繰り返された。そのあと、楽譜から眼を放さず歌うように喋る先生の声が私に届いた。

「それ、召し上がっていいのよ。戴きものだけど、おいしいわよ」
すぐには私に向けられた声だとは分からなかった。綿ぼこりの私なんか、先生の視野に入ってはいけないと思っていたから。驚いてしどろもどろになり、何と答えたか覚えていない。

それから毎週皿の上には、キャンディーやチョコレート、クッキーと替わったが、姉に二つほど残こして、あとは私が全部食べてしまうのに丁度よいくらいの嵩が、いつも載っていた。先生に鬱陶しがられていないのが嬉しかった。

私は次第に姉のレッスンに没頭した。姉が弾く曲は、右手の旋律が左手に移るところも、和音も混然と頭に入っている。メモ帳と鉛筆をポシエットに忍ばせていき、深い意味は知れないながら、大切に思える先生の言葉や単語を、膝の上でこっそり書いた。それは今も大切に仕舞ってある。姉には、ばれていない。

涼しくなり始めたころ、門下生の発表会があった。姉はまだ出られない。現役の音高生や音大生が腕を競う、ちよつとした演奏会の趣に、私は圧倒された。

生徒のプログラムが終わると、ブルーグレーのドレスを着た先生がステージに上がった。ゆつくりとお辞儀をして頭を上げると、客

席の奥の方に目をやった。そして、去年、このステージで演奏したという男の子の名前を挙げ、震災でなくなったことを告げた。一瞬会場の空気が揺れ、私の呼吸と瞬きが止まった。

「亡くなった彼に」

少し間があった。「そして」先生は顔をあげて客席をみまわした。

「たいせつな人を亡くした方たちに、捧げます」

先生が弾きはじめた曲は、ゆつくり始まったが、不協和音だらけだった。テレビなんかで流れる、ふつうにいう、逝ったひとに安寧を、というのとはあきらかに違った。これはなに、先生は少年の理不尽な死におこっているのかと思った。私には、すぐにわかった。死んだ男の子が弾いていた曲だ。先生が最期にきいた彼のピアノなのだ。

いま先生は、ただ一人の男の子のために、その家族のために、そして私たちの兄と家族のためにだけ、弾いてくれている。涙が凸レンズになつて先生を浮き上がらせたり歪ませたりしたが、私は手放して涙と鼻汁を流し続けた。嗚咽に喉を開放することはしなかった。耳慣れない和音を追いかけながら、喉の奥で歌い続けた。

多野先生のレッスンに付き添えたのは、私のレッスン日が姉と重なるまでの一年ほどだった。

姉が音楽高校に入学した年、梅雨明けを待って、我が家は、耐震工事と防音室の工事にとりかかることになった。兄が死んで二年あまりが過ぎ、私は小学三年生だった。

耐震工事には補助金がでる。申請に必要な手続きは工務店が請け負ってくれると父から聞いていた。

「次の日曜日に打ち合わせに来てもらおうよ」

遅い夕飯を食べながら父が言う。風呂上りの姉はブラ付きのタンクトップとピラピラの派手なストライプの長いスカート。私は姉のお古の部屋着でいた。首元や袖口にフリルが沢山あって可愛いのだ。母は可愛い服は似合わないと言って買って欲しくない。

「あら、梅雨が明けてからってお話しじゃなかったかしら」

「うん、申請に要る書類の準備にかかりたいそうさ」

「工事はどちらから先にかかってくださる。日曜日はいまさんのよ」母の関心は、レッスン室にしか向いていない。母屋とはドア一枚で繋げるか、来たひとが気兼ねなく出入りできるように手洗いも設けた別棟にするか迷っているのだと、また言い出した。何度聴かされたかわからない。姉を盗み見すると、頭に巻いていたタオルを外して肩に置き眉間に皺を寄せている。

父はうんうん、と頷き、「それも含めてうち合わせてみよう。見積もりを頼んでおくよ」と言った。

父が苦笑いしながら言っていたことを思い出す。

かあさんはグラランドピアノのある家が夢なんだよ。子供たちの弾くピアノを聴きながらお茶をするそうさ。

じゃあ、とうさんの夢は？

遠い眼をして父は言った。

かなえられたよ。息子とキャッチボールすること。

なんかそれって、テレビでだれか言ってたよ。真似っこだあ。

そっかあ、と父はべそをかく子供みたいに眼や鼻や口元を顔の真ん中に寄せ、笑っていた。

ネイコとニコへの夢は？ と言えなかった。父がリトルリーグに入った兄と車止めのある道路に出てキャッチボールをするのは、あまりにも日常の風景だったから。そんな当りまえなことを挙げる父が、切なかった。

耐震工事を言い出したのは父で、対応しようとしているのも、父ひとりだった。父に問いかけられなかったことの答えが、私の目の前に示されていた。父の願いは、残った家族を守ること。父に味方をしようと思った。一人ぼっちの父が気になったのと、家族が無関心なまま工事が進むのは、震災遺族として恥ずかしかったから。

工務店の人は薄い色のチノパンに紺色のポロシャツで玄関に立っていた。スリッパを揃えて勧め、父を呼んだのは私、姉がお茶を運び、私たちはそろって挨拶をした。額が広くなりかけたそのおじさんは工務店の社長で、父と近い年齢らしかった。それからも打ち合わせがある度に、私と姉は行儀よく父に従った。

母は連日出掛けていた。買い物の手間を省くため、食料品も日用品も、マーケットにカタログ注文をして配達してもらい、食事の支度をしてから出かける。

夏休みになってからは、姉がピアノの練習をしているあいだに私が風呂掃除をし、洗いあがった洗濯物を干す。姉は二時間ほど練習

してから私にピアノを貸し、掃除にかかる。私は掃除機の騒音をバツクにお稽古に励んだ。

二学期が始まると、母が時間の遣り繰りをして、大工さんに出すお茶と三時のおやつを準備した。

十月半ば、耐震工事がすみ、レッスンス室の内装工事も来週中に終わるといふ週末だった。音楽教室のレッスンを終えた私は駅からの道を帰ってきた。路地を曲がると、家が見通せた。西日の当たる玄関が、遠目にもひらけて見える。なんか変だ。急ぎ足で進み、門扉の外に立って見回した。玄関の外壁の白さが目をさす。何かが足りない。門扉の両脇に鬱蒼と茂る金木犀がなくなっていた。

それは、毎年暑さが落ち着いて夜気が静まる時季に咲きはじめた。かすかな香りが空気に溶けこみ、粒つぶの黄金色の花が開いたことに気づかせてくれる。私は、香りをたよりに濃く堅い葉の中を覗き込んで、あ、あそこで咲いている、と探し当てる。花房が見つかる。いつもまず兄に教えてあげた。兄は鼻をひくひくさせて、最初に見つけた妹の手柄をほめてくれた。

兄が過ごしたさいごの年、ママチャリっぽい自転車を卒業して、マウンテンバイクに乗り換えていた。颯爽と乗りこなす兄は、足まで長く見えた。

金木犀の花を見つけた私は玄関の上がり框に腰かけ、塾から戻る兄を待った。タイヤが砂利を踏む軽快な音が近づく、ブレーキがキユツと鳴る。私は玄関の裡にいて、その音をきく。そしてカーポートの隅でマウンテンバイクに二重ロックをかけている兄を想像す

る。スニーカーの足音に耳をすませる。ここだっと思うと兄の鼻先で玄関をあけ、金木犀が咲いたことを知らせる。

姉の金木犀への評価はちがった。咲き始めがちょうどいいのよね、満開になると、見た目は豪華だけど、においは濃すぎて安っぽくなっちゃう。子供向けの香水みたいだわ、と意地悪を言う。それにっいては、私も兄も金木犀の擁護はしない。たしかに香りの盛りのいつとき、両脇から被さってくる甘い香りを、煩わしく感じる日もあった。

父の話では、この家を買った時から植わっていたらしい。伸びるのが早く、春休みの半日をかけて、父が枝を払う。子供ら三人で枝をゴミ袋に入れる手伝いをした。家で唯一、手のかかる木だったが、それは家屋の一部分だった。家の前を通る人が、いい香りねと立ち止まって見上げてくれると、その人に微笑みを送りたい気分になった。

門扉は、軽く押すと開いた。玄関先はきれいに掃除されていて、葉も小枝も残っていない。生木の白い切り口が痛ましかった。玄関の鍵も開いていた。

台所に立つ母の後ろ姿が見えた。普段着のざっくりとしたデザインの小花柄のワンピースを着ている。化粧つけのない顔で振り向き、「あら、おかえり」と言った。

「どうして」と言う私に、門の両側におなじ種類の木があるから、うちだけに不幸がきたのだと、母はさらりと言ったのけた。だから知った人に頼んで切ってもらったと。家族から不幸を取り払うのに

いったい誰の許可が必要なのかしら、とも。遅れて帰ってきた姉が後ろから言った。

「かあさん、わたしたちの留守を狙って計画たてたのね」

翌日は日曜日で工事は休みだった。人の出入りのない静かな一日のはずだった。ところが午後になって、両親の言い争う声が、父が仕事部屋にしている小部屋からあがった。居間でテレビを観ていた私は、声の主が両親だと信じかねた。だが父は、呆然としている私を無視し、ずかずかと姉の部屋に入り、仕事部屋に呼んだ。

夕飯のあと、父と呼ばれて家族四人で居間のテーブルを囲んだ。父が私の顔を見て言った。母のことだった。入院している時に知りあった人に勧誘され、カルト集団に入っていたのだと言った。母はスローガンのように「宗教の自由」と返した。金木犀を切った理由を言い放ったのと同じ声だった。腕に粟がたまった。

父が母の前で娘二人に厳命したのは、決して母と出掛けないことだった。父は隣り合って掛けている母に顔を向け言った。ぼくはこの子たちを母親から守るから。

母はまっすぐ前を向き、姉と私の後ろの壁を素通した何かをみつめているようだった。瞬きもしない目つきが怖くなって、そっと後ろを見たけれど、もちろんそこはただの壁紙だった。

寝る前に姉の部屋へ行った。いま起きていることを噛み砕いて説明してほしかったからだ。しかし私に教えてくれたのは、土曜日は塾に行っておらず、教会という所の集会に通っていることだけだった。

「どうして、ねいねいがそのこと知ってるの？」と自然に口からでた。

「ズルしたの。だから訊かないでほしい」

相変わらず留守がちの母の代わりに、洗濯や掃除は私と姉で分担した。母は、家族に伏せていたことが知れてしまうと気楽になったのか、夕方から出て行く回数が増えた。父は放っておきなさい、と言った。母が家を出た後で知ったのだが、そのときすでに離婚の調停が進んでいたのだ。

入信が発覚してからの母にどう接していたか思い出そうとすると、台所で調理をする姿しか浮かばない。食事の支度をし、プリンやババロア、クッキーやおやつが手作りなのも変わらなかった。母が手際の良い料理上手だと納得したのは、私が主婦になってからだ

が。

おいしいご飯があれば、家の中は回っていくものだな、とその生活に慣れてきた十歳の私は、首を傾げながらおもった。あるとき、姉と二人で囲む食卓で私は呟いた。

「かあさんの宗教って、別にいいんじゃないのかなあ、このままで。教祖様が空中に浮かぶ、っていうのじゃないんだしさあ。悪いコトしてるの？」

姉が箸を置いて、きつい目で私を見た。

「そのコドモ、正気かい」

私は予想を超えた姉の強い目から距離をとろうと、椅子の背もた

れに磔になった。姉は私を見据えている。

「かあさんの宗教団体がしてきたこと、あとで紙に書いて説明してあげる。それよりもっと大事なことがある。樹を切ったでしょ、わたしたちの気持ちを考えずに。あの時のかあさんの、声、ふてぶてしい物の言いかた。かあさんは、アマネくんを、神様に売っちゃったのよ。」

姉は興奮していた。ご飯にへらへらと尻尾を振っている妹のために、我慢をしているのだとしたら。私は椅子から背中を引き剥がし、姉のそばに立っていった。ごめんなさい、と言って姉の肩に体を寄せると、汗の混ざった肌のおいがした。髪にそっと触れた。柔らかな懐かしい手触りだった。

十一月になって、中古のグランドピアノが入ったと連絡があった。父と三人で楽器店に行き、試し弾きをする姉を、展示スペースの椅子に掛けて二人で見守った。姉が店の人に何か言っている。隣に掛けた父が体を寄せてきた。顔は姉に向けたまま囁く。

「なあ、ネイコは何を言ってるんだ。お前も習ってんだから少しはわかるだろ。翻訳しろ」私は大仰に頷き聞き耳を立てた。おおまかに分かった。

「音色ってわかるよね、とうさん」声をひそめて言う。今度は父が頷く。「それに注文つけてるの。搬入してからの調律で調整できますってさ」

夕飯をご馳走してくれた父からお金の話がでた。グランドピアノ

の購入費もレッスン室の費用も、かあさんに負担はかけていないから、おまえたちは気に掛けないようにと言った。

ご飯を中心に日が巡ることに変わりはない。私たちは母の料理に、何気ない感謝の言葉を惜しまなかった。おいしさが言わせるのだが、言うほどにそらざらしく響いた。母と交わす話題がそれしかみつからなかった。

姉が私に感情をぶつけた日以来、母のご飯が今日からなくなっても何とかなると思えた。でも毎日食べられるおいしいご飯は、麻薬のように私を満たしてくれた。

姉が第一志望の東京の音楽大学に合格した春、母は小学校の卒業式に出席したあと、家を離れた。前触れがなかった。その夜、父は娘たちに話した。離婚はすでに成立していたが、姉が第二志望の大学に家から通うとなれば、ニコが高校生になるまで、母親にいてもらうことにしていた。しかし姉は上京する。姉の不在によって、中学生の妹に対する母親の力が強まるのがこわかったのだと父は言った。かあさんはお金を持っているから心配はないよ、伯父さんのところへ行ってるはずだとも付け加えた。かあさんの宗教、べつにいいんじゃないの、と姉に言ったのが、父に伝わったのかもしれないと思った。母を失ったという現実には、思いのほか重苦しく喉を塞いだ。

母が去った翌日は、肌寒い曇り空で始まった。お昼は、母が作り置きしたカレーを解凍して食べた。

「グランドピアノ、使っていていいわよ」

姉は言って普段着のジーンズにブルゾンを羽織って出掛けた。夕方になって、晩御飯はどうするか冷蔵庫を覗いていると、マーケットのレジ袋を片手に、重そうなたートバッグを肩に担いで帰ってきた。図書館から借りた料理本がずっしりと入っていた。

「これ、お皿に分けて」とレジ袋をテーブルに置くと、なにやらぶつぶつ言いながら本の頁を繰っては付箋を貼っていた。手元を覗くと「ご飯くらい自分でこさえなくちゃね、あんたもわたしも」とカラーページから目を外さずに答えた。

数日たった朝、私は夢うつつで朝をむかえた。目覚めのまぎわ、誰かが「ふたこのきようだい」と口にした。ああ、と胸を衝かれ目を開いた。私と姉を保護してくれた自治会長の家のおばさんの声だと思った。

早朝の部屋の空気はしんと冷たかった。布団を首元まで引き上げ、いつも連れ立って行動していた二人をおもった。幼児の私は二人のあとを追っかけては撒かれ、地団太踏んで痲癩をおこしていた。そうすると、外から帰った姉がしやしやり出てきて、悔しがった妹が余計に泣くようなことを言った。幼な心にも姉の言い分が理に叶っているのがわかって、泣き声は高くなった。

ふわ髪をキャップに押し込んで、ショートパンツの立ち漕ぎで、

リトルリーグの男の子たちと自転車で駆ける姉は、恰好がよかった。男の子たちに混ざっているはずの兄がどこにいるか分からなかった。私が見ているのはいつも姉だけで、兄の姿はその背後にひいた影に見える。そうだ、兄との間にはいつも姉が立ちはだかっていた。兄への姉の愛情のあり方が、兄の死の衝撃から、妹を守るという結果になった。悲しもうにも、もう兄の顔がはつきり浮かばないのだ。

金木犀の開花は、姉を抜きにして忌憚なく兄と触れあえる、ささやかな機会だった。その木を不幸の元凶だと言って信じさせる信仰があったのだ。その教えとやらと同じくらい母も醜悪だ。母親と話したくなるたびに、私は、その時の感情を思い出すことにした。

私は証券会社に勤める父親と四年間二人暮らしをした。

卒業して帰ってきた姉が開いたピアノ教室は、二年ほどで軌道に乗った。私は短期大学のピアノ科の一年生になっていた。父と三人の暮らしが、当分は続きそうだと呑気に思っていた。

しかしある日曜日の朝の食卓で姉は言った。家を出て恋人と暮すことにしたからと。食事を終え食卓を立った姉を、父は呆然と見送っていた。私たちはしよんぼりと食卓に残された。父は手もとに視線を落とし、知っていたのか、と呟く。私は首を振る。でもね、外泊をするという予兆はあったのだから、これは誰にも止められない成り行きなのよ。

引越した直後もピアノ教室は休みにならなかった。夕方、教科書の詰まったリュックを背に帰宅する私の後ろから、こんにちわ、

と声をかけ自転車で追い越していく姉の生徒の顔ぶれも変わらなかった。

私と父は、姉からまるつきりほつぽり出されたわけではなかった。レッスン日にあたる平日の三日間は、早くに来て夕飯の支度をしてくれた。通勤ラッシュに揉まれ通学する私に、あんたが卒業するまでやっただげると言った。

父の転勤と私の結婚で空き家になった今も、ピアノ教室は続いていた。

前回誘ってくれたのは去年の十二月、ロシアの歌劇場のオーケストラの演奏会だった。ソリストに、十六歳でパガニーニコンクールに優勝し活躍している女性ヴァイオリンニストを迎える。プログラムは、日本人には聴き馴染のあるチャイコフスキーのシンフォニーと、ヴァイオリンコンチェルト。関西の一年の締めくくりになるという前評判での来日だった。

メールには金額が書いてなかった。演奏曲目と開演時間、そのあとに「終わったらごはん行き、六時予約済」とあった。珍しい。なんかあったのかな、と独り言がこぼれたが、財布に多めにお札を入れて出かけた。私にとって、2017年最後のイベントだった。

暖冬と言う予報どおりの、風もない午後だった。ホールの敷地の路から広い階段を上った。姉はホールの入り口に立っていた。身長は170cm弱ある。踵の高いヒールのブーツを履き、ベージュの長いコートを着て、ベレー風の帽子を載せていた。私とは10cm以上

の開きがあるので、どちらが先に着いていても、見つけるのは私の役目だった。近づきながら私が片手を小さく振ると、姉は耳のそばに上げた指で、おいでおいでをした。

一階の並びの指定席に掛けた。席は、オーケストラを聴くにはちょうど良いステージからの距離で、ソリストもよく見える位置だった。チケット代を渡そうとするが「今日はいいの、わたしのおごり」と受けとらなかつた。開演前着席のお知らせオルゴールが鳴ったので周りを見渡すと、二階席の後ろの方まで埋まっている。三階席にも人が入っていた。

「こない席、チケットとりにくかったでしょ」

姉は答える代わりに前をむいたまま微笑んだ。

「だいじようぶ、パトロンがいるの」

私が黙ったのを見て「冗談よ」とまた微笑んだ。

「いえ、別にいいけど、お礼言っといってもらおかなっておもって」下を向いてぶつぶつ言う妹に、姉は、また頬をゆるめた。

終演になって会場が明るくなった。普段なら込み合う前に立つのだが、今日は急がない。食事の予約時間に余裕があった。

外に出ても、重層な音に洗浄された体を、ヴァイオリンの旋律が駆け巡っている。背筋もすっきり伸び、歩幅も広くなり、指先の毛細血管まで血液が拡がっているのを感じる。

正面階段を降りたところで姉の歩調が緩やかになり、私と横並びになった。私はポケットから手袋を出しかけたが、そのまま押し込んだ。姉をみると、バッグを肩に掛けたほうの親指をコートのポケ

ットにひっかけ、外に出した四本の指でスウィングしている。

陽が落ちてきた。歩くのに不自由はない明るさだが、路に沿った植え込みに紛らわせた足元の灯りが点灯する。私たちはそれを辿って車道まで出た。

「歩こうか」と信号を渡ったところで立ち止まり、姉は言った。

十分ほど歩いたところから、クリスマスマスの飾りつけが眩いショールームが、目につきはじめた。二駅分の距離を近道した。

夜空を塞ぐ見慣れたターミナルビル群が現れたところには、私の日常感覚は並みに落ち着いていた。広場のような通路を抜けると、姉は、横丁の呑み屋街から外れた間口の狭い店のドアを押した。

「ここよ、おいしいパエリアを食べさせてくれる。好物でしょ」

柔らかい照明が暖かな、レストランというよりパブといった雰囲気気の店だった。店の人は姉の顔を認めると、予約席のプレートを用意した奥のテーブルに案内してくれた。私たちはコートを預け、姉は帽子をとった。少女のころのふわ髪が現れた。膨れないように帽子で押さえていたのだ。わたしの視線に気づいた姉は、髪を軽く押さえ、いたずらっぽく笑った。

「お疲れ」「お疲れさま」

私たちは二時間あまりの音の体験で心地よく疲れたお互いの耳を労って、ビールのグラスを顔の前に上げて乾杯をした。向かい合ってしまったら、これといった話題はなかったが、きまざさはなかった。

「パエリアを作ろうとしたことがあったのよ」私は専用フライパン

を揃え、ムール貝を手に入れた時のことを話した。ネットで検索したとおりに調理してみたのだが、サフランを買い忘れ、まあいいかつと手を抜いたところ、珍妙な出来上がりになったのだった。それは結婚当初の出来事で、夫とキッチンに立ち、二人でこしらえ、二人で失敗した夕飯だった。その実際の話から、私は夫の存在を消した。ひとりの失敗談に仕立てて話したのだ。姉ならその背景を推察できるだろうから。私の安否確認してくれる相手に、近況を届けておきたかったのだ。

パエリアの皿が引かれ、デキヤンタを二人で空けた。常連の姉の好みを承知した店の人が姉の前にグラスを置き、私を見た。

「妹さんのご注文は？」

姉が店のオーナーだと紹介した。清潔感のある人だ。

「似てらっしゃる」

「そうなのよ。うちの子供らは親には似てないけど、きょうだいはよく似てんのよね」

姉は「わたしたち姉妹」とは言わなかった。兄をふくめた三人きょうだいをいつも念頭においている。オーナーは軽く頷き、酒の知識のない妹にかわって、姉がした注文を受けてくれた。

オーナーのひと言が、このテーブルに「家族」の話題を持ち出すのを後押ししてくれた。終電まで時間があった。

「あのね、訊いてもいいかしら。ズルしたってこと」

姉はグラスをテーブルに置き、少し考えているふうだった。

「かあさんの入信がばれちゃったでしょ。その日のことだけ」

「ズルって言ったかどうか」と首を傾げ、父が離婚を急いだ理由が、新興宗教と別にもあったのだと言った。それは証券会社に勤める父の仕事に関わる問題だった。

母親の三面鏡の引き出しから教会の冊子をみつけ、父親に渡したのは姉だった。用事があったて塾に電話をしたら、土曜日は授業を持つていないと言われ、九時過ぎにならないと帰宅しない母親の行動に、不信任を募らせた。金木犀の木が切られる二か月くらい前のことだった。

冊子の裏に、教会で毎週土曜日に開かれる集会の案内が載っていた。遅くに帰ってきた母が、心ここにあらずという風情でいる様子に合点があったと姉は言った。仕事ではなく、二年も前からその集会に通っていたのだと。

父に頼んで脱会を勧めてもらいたかったが、言い出せなかった。母に真偽を糺す前に、持ち物を漁った後ろめたさがあった。ズルとというのは、そのことを指したのだろうと姉は言った。それもだが、母の入信を父が知ってしまったあとの家族としての先行きが、想像できなかった。しかし姉一人の心の裡にしまっておくには、負担が大きすぎた。姉の逡巡は、母が金木犀を伐採したことで振り切れた。両親は口論になった。挙句に伯父の名義を借りて株をやっていると母が言った。ピアノもレッスンスターの工事費も自分が払う。夫から情報を引きだしたことなんかない。自分の裁量でやっている。「儲かってんのよ」と悪びれず言ったという。

「とうさんが離婚に躊躇しなかった一番の理由は、株に手を出した

からなの。あの二人は職場結婚でしょ。会社の内規は知っている。とうさん、許せなかったのよ」

父の会社では、社員や家族が、株の売り買いをするのには規制が掛かっている。

「出世する一握りの人は別だろうけど、証券マンって先がみえてくるとね、出身地近くの支店長で定年を迎えるっていう道筋があるらしいわ。とうさんの東京転勤もそんなところだわね。かあさんのこと、きつかったんじゃないかしら」

そんないきさつがあったとは、まるで知らなかった。私は気もちを落ちつけようと、目の前のグラスに手をのばした。姉がそれを制し、空いた手で水を頼んだ。氷の入ったタンブラーが運ばれてきた。「ニコには株のことは言うな、おとなになってからでいいって、とうさんが」

私は、氷が満載されたタンブラーにじつと唇を押し当てて時を流した。そして十八歳の姉のズルを受け入れようと思った。

「レッスンスターとブランドピアノ、それにわたしが東京へ行ったから家のお金が底をついちゃって、妹にしつかりした受験体制がつかれなかった。それで地元の短大のピアノ科になったんだと、ずっと申し訳がなかった。受験に本腰を入れなきゃいけないときに母親は出て行った。父親は仕事で手いっぱい。わたしは自分のことにかまけて力にならなかった。家族の事情のとはつちりを、妹一人が受けてしまった」

音楽教室の一生徒だった私を自宅のレッスンスターにし、推薦入学を

取り付けるまで力を尽くしてくれたのは、姉の元先生だ。そのことを言うと、姉は黙って頷いた。

「友達から聞いたわ。そのこに言われた。ひどいよつて。姉はオトコを追っかけてるし、ピアノを大好きな少女のことを本気で考えてくれたおとなが、先生だけだったなんて」

姉は息を深く継いで、悪戯っぽく笑った。

「それでもピアノを続けてくれて、ありがとね。この落とし前はきっちりつけさせてもらうから、待っててちょうだい」

私は、落とし前と言われて、引き込まれるように「ええ？」と声に出して笑ってしまった。姉は話が深刻になりそうだと、ふざけた言葉を持ち出して、その場を救うわざを持っている。

「ありがとね、^{アネ}姐さん」私も返した。

すると姉は、椅子に背を預けるようにして何か言った。聞き取れずに問い返す私に、視線を私の頭越しに据えたまま声を大きくした。「ダメなモノに見切りをつけるのは、早ければ早いほうがいい」

夫とのことだ。私生活に踏み込まないという暗黙のルールがあると思っていたのは、私の一方的な思いこみだったのか。戸惑った私は気弱になり、目を伏せた。姉はぐっと身を乗り出し、目をまん丸にして覗き込んだ。私は首をすくめ、次に言われることを受けようと顔をあげた。牛耳られる妹になってしまっていた。

ところが姉はまたしても相手をその場では深みに嵌らせないすべを行使した。自分の言いぶんだけを口にし、相手に決断を迫らず

言い放ち、即座に話題を変える手法だ。

「金木犀伐採の件ね、門の両脇にあると不幸がおきるつてやつ、あれは母親の宗教の教えではないのよ」

意外な発言に、まんまと姉の手にのつてしまった。私も身を乗り出した。

「え、そうなの。てっきりそうだと思っていた」

「角の独り暮らしのおばさんに、あのあと言われたのよ。よろしゅうございましたねえ、おかあさんにも申し上げておりましたが、これでご家族の不幸から、あなたも守られますよ、だって」

同じ自治会の隣の班のひとだ。顔を合わせれば挨拶はしていた。家の前に立って、金木犀を見上げていた姿を覚えている。

「追いかけてって訊いたら、これはワタクシの考えです。宗教には入っておりませんだって」

「ええつ、そうだったんだ」

私たちは大きな声で笑った。なんで笑っているか考えないまま互の顔を見て笑った。それから終電間際まで、沢山食べ思いきり呑んだ。「愉快だね、ニコ」姉は繰り返した。それから一週間が過ぎたころ、ショートメールが届いた。

（とうさん結婚するつてよ）父は来年定年になるはずだ。さすがに了解とは返信できず（誰と？）と送った。

（ギャルではないフツーンのおんなと）

気がつくつと、テーブルに突っ伏して眠っていた。窓の外は真っ暗

になっている。強張った首筋をそろりと起こし立ち上がると、窓ガラスに、髪がくしゃくしゃになった私が映っていた。その姿をカーテンで閉じ、温めたミルクを手に、テーブルに戻った。夕飯の時刻は過ぎていた。

結局私は日がな一日、文書を相手に考えあぐねていた。挙句に辿りついたのが姉の言っていた「落とし前」だった。

添付メールに箇条書きにされた一項めは、実家の名義変更についてだった。父親名義になっていたのを、次女仁子名義にするための手続きを半年前からすすめているとある。それにかかる費用ならびに贈与税などは父親が負担する。名義変更後の固定資産税は仁子が負う。以後実家の管理をすること、という内容だった。

括弧つきで添え書きのように、くだけた文章が続いた。

（とうさんの再婚の気配は一年ほど前からありました。だから、妹より情報量の多い長女は考えねばならなかった。親というのは先にこけてしまうのが順番。認知症か癌かほかの病気かで。相続で、見ず知らずのオンナが実家に関わってくるのは、カンベンしてください、と言いました。そして脅してやったの。父子家庭なのに、離婚問題にかまけて末っ子の将来を考える努力を放棄した父親に、責任をとる最後の機会をあげます、つて。ニコに言ったことあるでしょ、覚えてますか、そのうちに、落とし前つけるから待ってなつて）

二項めは実家のピアノ教室についてだった。向こう三年間ニコが引き受けること。その後閉鎖し実家を売却することはやぶさかではない。勿論継続して教室を運営できればそれもよし、と四角張った

言い回しで記されていた。そのあとに括弧つきの話し言葉が続く。（ニコさん、日曜日あいているでしょ。夫と過ごすために仕事を入れないって、もういいんじゃないの。実家の生徒は土、日の枠に入ります。バレエの仕事も続けるのよ。伴奏法の勉強をしないで。ニコさんにあっています。K先生がおすすめ。先生が来られている大学に編入するのもよい考え。多野先生に相談しなさい。話は通してあります）

先走らないでほしい。ねいねいの落とし前つて、「経済的な自立」の後押しつてこと。短大でできなかったことをやれつて。もし私が夫との暮らしを立て直すことが唯一の希望だと言ったらどうなの。姉の答えが聞こえた気がした。「執着しないのよ、ニコだつて行きつく先はわかっているはず」離婚を推奨されている気がした。

妹の気持ちを見透かすような独断先行は悔しいのだが、何度読み返してもここまでくると、気分が上がってくるのを抑えられない。音楽教室の収入は僅かなものだ。自宅の生徒なら月謝が全額収入になる。家賃のいらぬ実家暮らしなら、自活もあながち無理とはいえない。離婚に一步近づいたのかしら。私は姉の仕掛けた罠に丸ごと呑み込まれて行く快感を味わっていた。とりわけ多野先生の名前があがったのが希望だった。先生のグランドピアノのそばで、音色だけに浸り込んでいた時間を思い出す。

二項めは受験生だった。（中学一年の女子。団地住まい。父子家庭。所持楽器は電気ピアノ。ペダルを使うようになったので、教室の鍵を渡し、出入り自由で練習をさせています。ソルフエージュ、

聴音、楽典、月謝はすべてまとめた額です。経済的な事情も絡みます。音楽科のある市立高校に入れてください。三年間は教室を閉めないでというのは、その中学生女子の面倒をみるということなのでしょう。夫と暮しながら実家の教室を引き継ぐのに支障はない。気持ちにけりがつくまで時間の猶予がほしかった。

しかし私の考えは甘かった。姉は実に狡猾だ。即日決定が必要な事柄を突き付けていた。私の泣き所を抑えていた。それは三項めの「犬」だった。

(バス道路の動物病院に犬を預けています。ボブといいます。引き取ってください。中型犬の雑種。三歳くらいの保護犬。虐待の痕跡あり。ほぼ社会復帰できている気のいい仔です。ホテル代は二週間分支払い済み。リード、食器、ベッドにフード。必要なものは実家にまとめています)。

犬、といえば姉への恨みがある。学校の帰りに駅前からついてきた犬を飼ってほしいと、母に頼んだことがあった。今思えば驚いたのだろう。小学生の娘の後ろでうなだれる薄汚れた成犬。母にシッシツ、と追い払われた犬は、尾の先を股に挟んで背を向けた。腰を落として逃げる犬の骨ばった尻を私は忘れない。母の後ろで黙って突っ立っていた能無しの姉のことも。

一読めは、なんで「犬」なのよ、あの時傍観していたのを忘れたのね。妹の弱みに付け込む姉に歯噛みした。しかしその感情は半日たつて別のものに取って代わられている。

安否確認をしあつて生きてきた姉妹の片方が、大切なものを託さ

れた。受け入れるしかない。仮に私が死ぬとしたら、姉は全力で妹を守ろうとするだろう。しかし残念ながら現在の私には託すものがない。たった一匹の犬でさえ。私は大きく溜め息をついた。

(調律はアップライトもグランドもすませました。レッスンに必要な詳細は書きだして実家のテーブルに置いてあります。よろしく。わたしは友人の留学先に行きます)添付文書は、それで終わっていた。

私は日曜日の朝がくるのを待った。夫には、これから姉に会いに実家に行くと言った。事実をずらした嘘だが、この程度の嘘への拘りは、夫に対してなくなっている。彼は食卓で新聞を読みながら黙って頷いた。

実家までは電車で半時間の距離だ。駅から商店街を抜け住宅地に入った。ワンピースの胸もとを汗がおちていく。アスファルトからの照り返しが、素足のふくらはぎをチリチリと焦がす。

家の前に立ち、門扉の外から不審者の目になって中を窺う。ツンと尖がった短い草がそこかしこに生えているが、荒れた感じはない。家の人が無精をして放っているだけという程度だ。

ブロック塀に添って回ってみた。隣家のクスノキが葉を繁らせている。下水路の蓋の上をそろそろ行つたが、背丈ほどある草が倒れ掛かつて先を塞いでいるので、戻った。

玄関ドアをあけると、乾いた埃のようなにおいが漂っていた。乾燥した畳と柱や建具の放つかおりに、埃のにおいがわずかに混ざつたような日向くさいにおいだ。

居間のテーブルに封筒とレッスン室の鍵、通帳があった。私はテーブルを遠巻きにし、家じゅうの窓を開けカーテンも全開にした。それから、鍵を手に、レッスン室の玄関にまわった。ランドピアノはきちんと閉じられている。ピアノのにおいが私を落ち着かせた。

鍵盤の蓋の上にノートがある。コクヨの横罫の薄いノートに鉛筆が挟んであり、そこを開くと日付と入退出の時刻が書き込まれていた。最新の日付は、きのうの四時から六時となっている。確認欄も設けてあるが空白だった。姉が犬の名前と並べて書いていた中学生の少女が、練習に来た記録なのだろう。前のページを繰っていくと、六月末まで姉のサインが入っている。

姉が好んで使っていたレッスン用の5Bの鉛筆で書かれている。私は確認欄のイニシャルを指で繰り返し撫でた。ほぼ一か月前までの十五年間、姉はここに立っていたのだ。生徒が何人残ってくれるかわからないが、間をおけばよそに流れてしまう。九月には再開しなければ。

準備期間はひと月あまりだ。そのあいだに引越しをし、私のピアノもここに移さねば。多野先生のところみたいにランドピアノを二台並べたら、姉の生徒たちは、かつての私のように感動するはずだ。私は練習記録ノートの最新のページを開き、きのうの確認欄に仁と書き丸で囲んだ。

居間に戻りクローラーを入れ、それから風呂場をのぞいた。脱衣場の棚には、シャンプーやコンディショナーに石鹸もクレンジングも

揃っている。ドライヤーもある。来た時に姉が使っていたのだろう。タオルも畳んで置いてあった。

眼を閉じ、首筋に熱いシャワーをあてる。横隔膜がゆっくりと揺がり、深い吐息が体の芯から零れだす。よい香りのたつぷりのシャンプーの泡で、短い髪をソフトクリームみたいに結い上げる。

……わたしの、また使ったでしょ。ニコったらまったく……姉の声が聞こえる。

「うーん、いいにおい、生き返る、アロマ効果だね」と呟いた。ピアノ教室も、ボブも少女も、まかしといて、へっちゃらよ、と思えてきた。

着替えに持ってきたTシャツと綿パンに着替え、風呂場から出てくると、居間は涼しくなっていた。ソファに掛け、姉の手紙を広げた。

各生徒の進捗状況や、本人に関する情報が細かく書かれていたが、少女と犬には触れられていない。姉自身については、友人の留学先に行く、とだけあった。一緒に日本を発つのか、追いかけて行くのか、いつ帰るのか、どこの国なのか。友人って誰？ 私が知りたいことはなかった。一緒にあった父親名義の通帳は光熱費の引き落とし用だ。キャッシュカードと暗証番号もあった。早速入金しなければ。

考え疲れていた。長椅子に仰向けに寝そべって手紙を胸に広げた。眼を閉じると、眉間のあたりで渦が巻きおこり、気絶するように意識が落ちた。

覚め際のあたまのなかで、サクサクと歩幅の狭い足音がした。薄目をあげ、こそごとと眼球を動かした。実家に来ているのだと知るのに、数秒かかった。柔らかいソファに背中が沈んだせいで腰が痛い。クッションを腰の下に敷くのを忘れて寝たのはひどい失敗だ。横になったまま柱時計を見上げる。眠っていたのは三十分ほどだった。

腰を伸ばしながら起き上がってソファに浅く掛ける。深い寝息のような呼吸が引かない。体が、もうひと眠りしなさいと指図している。指示に抗えず、私は床に仰向きに転がり、体が覚醒するのを待った。

不規則に動く人の気配が、庭に面した掃き出し窓に寄ってきた。床にじかに寝ているからか、さつきよりも鮮明に聞こえる。夢でも空耳でもなく、誰かいるのだ。私は起き上がり、掃き出し窓に近づいた。レースのカーテンの隙間からそっと庭をみる。

人がこちらを向いてしゃがんでいる。虫よけか日除け用なのか長袖の白っぽいトレーナーにジーンズを穿いている。手に園芸用の小さなスコップがある。庭の草を引いているのだ。体格からすると女性のようなだが、麦わら帽子が邪魔で顔も年齢も判別できない。急に声をかけては驚かせてしまう。様子を見てみると、その人は折りたたんだ体を伸ばすように立ち上がった。充分に伸びをしてから、ラジオ体操まがいのことをしだした。上背はあるがおとなの骨格ではない。体も薄くて、見ようによれば貧弱だ。

体操がひと区切りついたのを見計らって、私はカーテンを勢いよ

く片側に寄せ、掃き出し窓をあけた。こちらを見た顔は、少女だった。驚く様子は見せず、ぺこりと頭を下げた。

犬のボブと並べて書かれていた生徒の名前が浮かんた。姉が日本を離れるについて、もつとも気に掛けている一匹とひとりの、片割れの名前だ。

「川西めり、さんですか」

彼女は麦わら帽子をとり、はい、と答えた。私は少女の目をじつと見た。アーモンド型の大きな目だ。

「わたし、貝沢ネイコの妹の、ニコです。よかったらありがとうございます」

私の生徒になる中学生だと思うと、すらりと言葉がでた。少女はすぐ脇にある外の水道で手を洗うと、首に巻いたタオルで手を拭き、掃き出し窓の外に重ねた沓脱石がわりのレンガにスニーカーを揃え、上がってきた。慣れた様子だ。私は、さつきまで寝ていたソファを彼女にすすめ、自分用に台所から椅子を運ぶ。少女が手伝おうと腰をうかせた。いいのよ、と目で制した。

「姉が草引き頼んでつたのですか。無茶だよ、炎天下だっていうのに」私は椅子に掛けながら言った。

「いいえ」小さくかぶりを振って俯く。「言われてません。けど、おうちの窓が開いているので、ご挨拶しないといかんしと思って」私が来て一時間にはなる。

「練習に来たんでしょ。弾いてくれてたらよかったのに。草引きなんかしたら、関節が堅くなって指、まわらないよ。遠慮はなしで、

今まで通りピアノ使ってたね」

柱時計を見上げた。正午を過ぎている。

「お昼、まだでしょ。よかつたらつきあつてくださる。手もしつかり休めてあげないとね」

少女も柱時計を見上げたが目を伏せ、もぞもぞと体を動かしした。

「あ、ごめん、わたしの都合ばかり言って。帰り、急ぎますか」

「あとう」

「ええ？」

「ボブはどうなりますか。ニコ先生のおうちに行きますか。先生のとこの仔になっても、また会えますか」早口の思い詰めた声だ。

虚を突かれてしまった。犬の扱いを考えるとところまで、私の考えは辿りついていなかったのだ。引き取らねばならないのだが、もう少し動物病院で預かってもらおう気だった。家に連れて帰るには、夫の了解も必要だ。

「午後の診察時間にでも病院に行つて」私はしどろもどろになっている。「どんな犬か見てからと思つてたの。大きさとか。犬、飼つたことなくなつて」なぜか私が劣勢になっている。「母が生き物嫌いでね」

「あとう、日曜だから、午後は閉まります。でも病院、一時まで開いてます」俯いたまま言う。私が言ったことを無視するつもりなのか。私は黙った。この強引さはなんなんだ。わたしは少女から一步引いた気持ちになつて、あからさまに眉をひそめ彼女を見た。が、少女は顔をあげず身を固めている。相手を見ない。膝に置いた掌は、

ぐうの形に握りしめられていた。あきらかに防御の体制をとつている。おもわず息が詰まった。

夫は手を挙げないひとだが、二度、その寸前までいったことがあった。妻の正論が彼を追い詰めたのだ。正論が解決の糸口にさえならないことを知っているのに。そのとき私は夫の反撃に咄嗟に身構え、目の前の少女と同じように、こぶしを握り締めていた。

喉がひりついた。持つてきたペットボトルは、とつくにカラになつている。私は洗面所に行つてうがいをし、水で顔を締めた。

初対面の中学生を前にして、私はいったい何をしているのか。びしょびしょの顔が鏡に映っている。だが何だか爽快な顔をしていた。とつと笑つた顔をつくり、洗面所から大きな声で言った。

「わかつた。様子を見に行つてみましょう。一緒に行つてくれますか」戸締りをし、少女の案内で歩いた。家の裏から、国道を十分ほど進んだところで自動販売機を見つけ、お茶のペットボトルを二本買い、彼女に一本を渡してから、一気に半分をあけた。

「まだ遠いのかしら」

「あの信号を渡つたら見えます」

指をさす方向に目をやると、信号が青に変わった。少女は駆けて渡つて行つた。私が渡り終えると、少女が行つた方向から、自転車を押しながら、おじさんがこちらに向かつてきた。前かごに小さな犬を乗せている。私は、直進してくる自転車に、立ち止まって道を譲つた。

前かごの犬は栗色で、おでこがぐるりと丸く、垂れた薄い耳がひ

らひらしている。リードはかごに固定されていて、怖がる様子はない。行儀の良さに感心して見ていると、こちらに向いた犬と目が合った気がした。私はふっと微笑んだ。おじさんは軽く頭を下げて通り過ぎて行った。少女を見失ってしまった。自転車が来た方向に行くと、少女は、「奎動物病院」の前に立っていた。

三十分後、ボブのホテル代の清算で返ってきたお金を手にした私は、信号前のお弁当やで、二人分の幕の内弁当と、インスタント味噌汁や単品のおかずを包んでもらっていた。

扉の外の木陰では、腹這いになった犬と並んでしゃがんだ少女が、しきりに犬に話しかけている。私は心の裡で嘆いていた。犬を連れて帰ることになるとは、えらい事態を招いてしまった。もうしばらく預かってほしい、と受付の女性に言うタイミングを、逃してしまつたからだ。私は初めて足を踏み入れた「動物病院」に臆していた。

受け付けで名前を言うと「ボブちゃん、お迎えですね」と髪を後ろで束ねた恰幅のよい女性が、カウンター越しに満面の笑みで応じ、私がお金を言う間もなく、奥に消えた。しばらくして、フロアリングをやかましく引く掻く音がし、薄茶色の結構大きな体躯の犬が飛び出して来た。丈の低い中型犬だ。肉厚の大きな耳を下げ、少女をめぐめて突進する。リードが引つ張られ、首輪が食い込んで喉がゼイゼイ鳴っている。短い前足が滑って顎から転びかけたのを、素早くしゃがんだ少女が抱きとめ、リードを握った。

目の前で起きた一匹と一人の一瞬の光景を、私は呆気にとられて眺めていた。

「よかったね、めりちゃん」リードを引いてきた受付の女性が声をかける。「また一緒に遊べるね」

少女は泣かんばかりの笑顔を女性に向けた。

「ボブちゃん、いいこで待ってましたよ。シャンプーもすんでますし、フィラリア予防薬と蚤とりのスポットも準備してます。すぐに清算しますね」彼女は私に言い置いてカウンターに戻った。

お泊り継続を言うなら、その時しかなかったのに、私は渡された薬を受け取り、薬の使い方まで訊いてしまった。少女と犬の再会の場面に圧倒されていたのだ。

木陰に伏せた犬は、私がお弁当の入った袋を提げて出てくるのを見ると立ち上がり、少女を従えて先頭を歩きだした。途中でしゃがんでおしっこをした。歩道に大きなシミが広がる。ボブという名前からするとオスでは。足を上げて電柱に放尿するはずでは。それくらいの雑学は私にもある。

「このこ、おんなのこなの？」

少女は「はい」と答え、拡大するシミを困り顔で見つめている。

「水、かけとかと怒られます」

「そうね、臭いわ」と私が言い終わる前に、用を足しおえ立ち上がった犬に、

「ボブ、ダッシュだよ」と走り出した。

あろうことか気が付くと、両手にお弁当の袋を提げ、炎天下をあたふたと息を切らして追いかけている私があった。車道から家並に折れ日陰に紛れ、ちいさな悪事の共犯者である私たちは息を整え、犬

を先頭に、何事もなかったようにぶらぶらと歩いた。なんだかかしてやったりという気分だった。

家に戻ると少女は、外水道の脇の小さなバケツに水を張り、中腰で犬を膝に抱きかかえて足を順番に浸し、そばの雑巾で短い足を丁寧に拭いてから、掃き出し窓から中に入れた。

「ボブの水入れありますか」

私はまだ中を見てもいなかった段ボール箱から、それらしきステンレスの容器を引っ張り出し、少女に渡す。彼女は水を入れて犬の前に置いた。犬はひとしきり飲むと居間を横切り、風呂場の廊下で腹這いになった。ひと仕事が終わった感があった。帰ろうとする少女をお昼ご飯に誘った。ボブにも、一握りのドライフードを、水のボウルの横の板敷きにじかに置いた。

「おっ、豪華」台所の食卓で向かい合った少女は顔をほころばせた。お弁当を仔細に眺める子供っぽい仕草に、私もつられて笑った。

少女は私に散歩の心得を教え、ハーネスの装着のしかたを指南し、今日の練習は家ですと行って帰った。私は居間のソファーに戻り、スマホを両手で握り締め、犬の寝息を聴いていた。事態は動き出してしまった。夫にそのことを伝えねば。

夕方、ターミナル駅に夫を呼び出し喫茶店で話をした。諸事情により実家で暮らすこと。引越しは手早くすませる。お金がないので、冬のボーナスは全額渡してほしい。

夫は両膝に腕をのせ視線を落とし聞いていた。私が黙ると、少し

間を置いて顔を上げ、私を見た。

「おれがわるいんだ」

懇願するような、体のどこかの痛みに耐えて絞り出す声だ。

「そう」と夫の手もとを見ながら続けた。触れるとゴツゴツしているが、私より小さな手だ。

「私かそのひとか、どちらかをとりなさいって言ったのに、取り合おうとしなかったのが、間違い」

「そんなこと、本気で言ってるなんて思えないだろ」

「今日から帰れないし、当分あなたに会うつもりもないから」

沈黙があった。彼はいやいやをするように首を動かした。しばらく黙っていた。

「おとこか」

「へっ？」ボブが頭に浮かんだ。男名前だがそうではない。「うん、世話のかかる相手ができたの」

困惑顔の夫を置いて逃げるように店を出た。夫が恋しくてたまらなかった。その手を取り、肩を抱きあつて、なんでこんなことになってしまったのかと嘆き合っていた。早くここから離れねば。家で話せば、なし崩しになるか喧嘩になるか。そうしないために外で会ったのだから。

手近な階段から地下街に降りた。閉店準備にかかっているブティックの並ぶ階を奥まで突っ切り、階段を上がった。地上に出たが、路地裏という感じで方角がつかめない。見回していると、コンビニらしい人工的な白い光をみつけた。夕飯になりそうなものを買った。

ついでに、パウチのドッグフードと、犬の散歩用に懐中電灯と電池も。

実家の玄関を開けると、カタカタとゆっくりとした音が廊下を来る。明かりの下に、ボブがゆらりと立った。九時をまわっている。

「オシッコ待ってたね、ごめんね」

頭を撫でなかったが、手を出すのはまだ憚られた。話しかけながら、昼間教えられたとおりにハーネスを付け、懐中電灯と、川西芽李に渡されたお散歩グッズバッグを手に、玄関を出た。

家並みの路地を行くうち、街灯から外れた、ひととき暗い家の前に出た。二階建てのその家は、板塀と庭木がつくる濃淡のある陰に囲われている。格子の引き戸と小さな屋根のある門構えに見覚えがあった。近寄って表札を読んだ。地震の朝、私と姉を保護してくれたおじさんとおばさんの家だ。兄が欠けてつまらなくなった家から逃れ、遊びに行った自治会長の家だった。おじさんが亡くなったあと、おばさんも骨折で入院したところまでは知っていた。母がまだ家にいたころの話だ。

格子戸の隙間から覗くと、飛び石伝いの奥まった玄関の軒先に、まん丸い門燈が下がっていた。ほの黄色いその灯りと目があった。おばさんは、と問いかける気持ちでじっと見つめ返した。

地面に落ちた蟬がちぢぢと体を震わせるような微動が、足元からきた。私はおもわず膝で身構えた。が数秒で地面に吸い込まれるように微動はゆるんだ。

兄が死んだあと、余震が落ち着いてからも、暫くのあいだ私に起

きたことだった。すっかり忘れていた感覚、私を不安にしたのと同じ時に、姉のことが蘇った。

姉と歩いていたあるとき、私は棒立ちになってしまった。

「なにしてんの、さっさと来てよ」

先に行く姉は戻って来ながら言う。

「揺れるの」怖くて涙が出そうになるのを堪える。

「えっ」そばに戻ってくると妹の顔を覗き込み、肩に手をおいた。

「ふわんとしてね、揺れるの。こわくないけど、つぎのおっきいのがくるぞ、くるぞ、くるぞって息止めて数えるの」

姉は、気のせいだとも笑いとばしもしなかった。長い腕でしばらく妹を抱きしめていた。静かな声の上から降りてきた。

「あんたはまだチビだから、原始的なのよ。進化の途中なのよ。野ネズミだとかもぐらだとかフクロウだとかに近いの。だから、ちょっとしたことには敏感になれる。安心しな、ここに、もうでっかいのは来ない。この地面に、そんなエネルギーは残っていない。これからは、腑抜けた静かな、ぺたんとした街になってくの」

姉は私の腕をとって歩いた。ぺたんとした街になったら、アマネくんたちは、どっかに押しやられ、忘れられてしまうのだろうか。

「ねえねえは、進化したの？」

私は、中学生になってやたらと背の伸びた姉を見上げた。

「うん、ちょっと前にした」

姉のいう進化の意味は漠然としていたが、ブラを着けるようになったし、下着も自分で洗濯して干している。それは進化と関わって

いる秘密に思えた。

黄色い門燈を見上げた。胸が軋み痛い。乱暴すぎたのだ、自分に課した今日一日のことは。始まったばかりだというのに、耐えきる体力はあるのか。怖くてたまらなかった。いまずぐ尻尾を巻いて、毎日帰ってくるひとがいる自分の家に、取って返したい。ベッドに潜り込んで眼を閉じていれば、朝が来る。

夫との暮らしから切れたくて来たけれど、辿りついた家は、所詮がらんだらだ。兄が死に、母が去り父が去り、かろうじて繋がっていた姉も去ってしまった。家の構えはあっても、空っぽだと分かっていたはずだった。冷や汗がわいていた。

冷たいものが、ふくらはぎを突ついた。ボブの鼻先だった。ぷんつと糞の臭いがした。暗いアスファルトに、固まりがころんとのっている。

「ああ、ごめん」私を現実に戻したのが犬の糞臭だなんて。落とし紙で拾うのを、ボブは大きな耳の根元を起こし、来た道に向けて静かに待っている。

「ご飯しっかり食べて、がんばらなくっちゃね」

犬はリードをいっばいに引き、つんのめりそうになる新しい飼い主を引き連れて、走った。

ボブは食器を舐め上げて人心地がついたのか、私がコンビニで買ってきた夕飯を広げるのを、腹這いになって上目づかいで見ているが、寄ってこなかった。

風呂をすませ、布団をソファの下に敷いて灯りを消した。空っぽの実家に慣れるには少し時間がかかりそうだ。今日のところは、居間を私の居場所にできた。テリトリーは、安全を確かめて焦らず広げていこう、野ねずみやもぐらやふくろうや、犬みたいに。

いえ、ボブは当てはまらない。慣れない家の中を嗅ぎまわっているのは私の方で、ボブには勝手を知っている余裕がある。姉と来て泊まることがあったとしても不思議ではない。ふとおもった。その時に一緒なのは姉だけなのか、誰かもう一人居た？

暗い部屋にクーラーの作動音がしている。ネイコさん、と呟いてみた。「ネイコさん」と大きめの声で言ってみた。

ドタンと音がし、ボブが転がるように玄関に向かった。跳び起きると、自分がとんでもなく心のないことをした、と慌てるのが一緒だった。ボブはしっかりとした尻を私に向け、短い足を踏ん張っている。姉が戸口から入ってくるのを待っているのだ。

ボブは、「ネイコさん」と姉に呼びかける誰かと暮していた。その人は、日に何度も姉に呼びかける。それをボブは聴いている。たまには「ネイコさん」への愚痴の聞き役にもされる。ボブは「ネイコさん」が誰を指すかを覚え、同じように姉の口から出る決して私に知ることのないその人の名前も、覚えている。

暫くしてボブは戸口を向いて腹這いになった。そのまま寝てしまったようだった。

翌日の月曜日、私は早朝から機敏に動いた。犬の世話をし、夫と

の家から、とりあえず入り用なものをスーツケース二つに詰めこみ、タクシーで実家に運んだ。また犬の世話をし、午後から仕事に出掛け、帰って夜の散歩を終えると、お弁当を食べ、崩れるように眠った。

翌朝になって練習記録ノートを見る。夏休みに入っている。川西芽李はきのうも午前中に来て正午前に帰っている。私は確認欄に丸に仁の字の書き、下の行にメモを書いた。

(ボブと遊べるようにするので、引越しがすむまで待つてくださいい)

仕事と犬の世話と荷造りのスケジュールをこなすだけの一週間を過ごし、寝具と段ボールだけの引越しをおえた。

実家には、整理箒筒や家族のコートを掛けていた大きな洋服箒筒、傷や落書きの入ったこの家の子供たちの勉強机があった。木製のベツドも残っていた。姉も父も母も、そして私も、越した先に合わせ、必要なものを新調する生活を選んで、出て行ったのだ。

食器も家具もあるもので充分だった。引き出しの奥から、触れると指先にうっすらと感じる埃をはたき出し、荷解きした物を収めた。

レッスン室の本箱には、生徒向きの楽譜が残っていた。姉のものはない。大切な楽譜は持つて出たのだと、大きく安堵の吐息をした。

八月に入った。姉のメールが届いてから二週間目の木曜日が近づいた。盆休み前に、専門業者の倉庫預かりになっている私のグランドピアノを、搬入してもらうことになっていた。私は練習記録ノートに書き添えた。

(今度の木曜日の午前中、練習室にもう一台ピアノが入ります。部屋が使えませんが、アップライトでいいなら母屋で弾けます。私はずっと家にいるのでいつでもどうぞ。ボブも待っています。玄関の呼び鈴を鳴らしてください)

雨避け屋根付き屋外ゲージと犬小屋の設置に業者が入ることは書かなかつた。犬雑誌の情報によると、ボブはコーギーという使役犬の雑種らしい。放牧された牛を追うのだ。それなら午前中の涼しいあいだ、庭で過ごさせるのも自然だ。預金残高をみると、散財と行ってよい額だったが。

グランドピアノを入れた翌週から、仕事はお盆を挟んだ一週間の休みに入った。私は朝夕のボブの散歩の時間をずらしては、自治会長の家をのりをうろついた。おばさんかその家族に、偶然を装って会いたかつたからだ。

うろつきだして数日たった曇り空の午前のことだ。おばさんの家の二階の窓が開いていた。誰かいるのだ。格子戸の隙間から中を伺っていると、ボブがリードを後ろに引っ張った。振り返ると、日傘をさした女の人がこちらを見ていた。

「どちらさん？」

私の話を聞いた五十がらみの人は、岩尾と名乗り、お兄さんのことは母から聞いていましたと言った。

「足が弱つてはいますが、あたまはしっかりしていますね」言葉を継ぎ「ちよつと待つてくださいね。わたしも母に用事ありますの

ん」とワンピースのポケットから携帯電話を取り出し、背中を向けて話した。面食らった私は、離れて待った。「楽しみにしてまして言うとかね」と話し、私に向き直りながら通話を切った。「ピアノ弾いてほしくて言うてますよ。そうやねえ、先方の都合もあるから聞いてみましょ。あしたにでも電話しますわ」

私たちは連絡先をかわし別れた。ボブは熱くなりかけた道路を、家に向かって舌を垂らして進む。

「先方、ってなんだろ。ねえねえもびっくりだわね、この展開」

あの夜以来、ボブがいる所で姉の名前は禁句にしている。川西芽李にも伝えてある。

翌朝、岩尾さんからの電話で起こされた。おばさんの家は買い手がだったので売却される。門燈は泥棒よけに点けっぱなしです、と笑っていた。おばさんがいるグループホームは長男の自宅に近く、ここからは二時間よりもっとかかるところにある。話の成り行きをきいていると、どうやら私は、九月のどこかの土曜日の一時からそこで演奏をすることになったようだ。

私は教えてもらったグループホームの番号に掛けた。岩尾さんの話は間違いなかった。時間は三十分ほど。クラシックだけでなく一緒に歌える曲を入れてほしいと言われた。

ママさんコーラスの伴奏で介護施設を訪問したことは何度かある。私は頭を切り替えた。思いがけないことだが、この依頼は私にとっては幸いだった。おばさんに会う場面を想像しても、何を話せばよいか、分からなくなってしまうていたから。

九月から再開した土曜日と日曜日のピアノ教室は、生徒が減ることもなく始まった。二台のグランドピアノへの反応はいろいろだった。「いっぺんに一人でふたつも弾けへんのに意味ないやん」と言う子もいたし、「でけんで」と二台に両腕をいっぱい広げて音を出す子もいた。生徒の興味がひいたのは確かだった。私にとってよかったのは、彼らの興味が尻すぼみにならないための、レッスンの工夫を考えるのが楽しいことだった。

教室では夏と冬の休みを除く月は、ひと月に四回のレッスンと決めていた。五週目にあたる週は休みになっている。九月は土曜日が五回あった。私は月末の土曜日に、グループホームを訪問することにした。

図書館で借りた昭和のヒット曲のCDや歌曲集を目敏く見つけた川西芽李が、何か問いたげにしていた。

「ああそれ、グループホームにいるおばさんのところにお見舞いがてら、ピアノを弾きに行くの」

「先生のおばさん、ですか」

「ううん、お世話になったかたよ」

次に顔を合わせたとき、川西芽李は遠慮がちに口を開いた。

「わたし、行ったらいけませんか」

意外な申し出だった。遠方なので一日仕事になること、ボランテニアだと家のひとに説明して、許可を貰ってくるように言った。彼女は領き嬉しそうに笑った。

「わたしのおばあちゃん、会うたん赤ちゃんやったから、覚えてへんけど、施設にいます。どんなどこか、いつぺん見たかったんです」
私が図書館で借りてきた資料を数冊自転車に積んで帰った。

五週目の土曜日がきた。電車は市街地を抜け、遠くまで開けた畑の中をいく。私の向かいに掛けた川西芽李は、これから訪ねる高齢者のグループホームのこと、そこに入居して三年になるおばさんと私とのかかわり、一つ質問しては暫く考え、また遠慮がちに問うてくる。間があるので、もう得心したのかなと黙っていると、次の質問がくるのだ。兄や姉に触れられたくない私は、注意深く説明する。始発の駅から乗車して一時間を過ぎたころから景色は海沿いにかわった。昼過ぎの太陽の照り返しで、防波堤越しに見える海面はハレーションをおこしている。対面の席に掛けた彼女は、海が見えるようになってからお喋りをやめた。白いブラウスの上半身を振って一心に窓の外を見ている。あまり熱心なのでそつと彼女の横顔を覗いてから、視線の方向を見やる。船のかたちもない。目に痛い海があるだけだった。

車両は次第に高台に上がりだした。特急電車に乗ったのだが、この辺りから終点までは、駅ごとに停まる。降りる駅を見逃さないよう、窓の外の表示に目を凝らす。

海岸線が樹木の間から見下ろせる高さになった。彼女は体を戻し、揃えた膝を私に向けた。眉間に緊張が漂っている。

「あら、気分が悪かったの、電車酔いするの？」

彼女は顔を顰め、かぶりを振った。

「水平線見たかったのに、空と海がひつついてるんです。そうしてたらなんか盛り上がって押し寄せてきそうで、怖なって、にらんだ」声を落とす。「線路、潰かってたでしょ。あたしらかて、そんなんならへんかって」

繰り返して映像で流された東北の津波の映像が立ち上がる。

「津波は地震の次よ。電車が止まったら、ここにいる人は」と空席の目立つ車両を見回した。「みんな逃げるのよ」彼女が心配性だとは思わなかった。私だって怖い。

「帰りはこのコースをやめて山の中を走るJRにするね。遠回りになるけど夕方には帰れるわ」

駅舎を出たところで川西芽李は帽子を、私は日傘を広げた。四方が見渡せる。どうやら私たちは、山を均した所に立っているらしい。陽射しが眩しい。空が高く薄く刷いたような刷いたような雲が浮いている。透明な空気のおいがした。そういえばマーケットに梨が出ているのを見たばかりだ。

正面に緩い下り坂がある。遠目に屋根の並びが見降ろせた。教えられたとおりその坂を下った左手に、介護施設があった。手前の駐車場は幼稚園の園庭くらいの広さがあったが、奥の建物は小ぢんまりしている。三階建てで、ブラインドをおろした一階の半分は掃き出し窓になっていた。上の階も大きく窓をとっている。三階は居室になっているのか窓の位置が高い。外壁はクリーム色で全体に明る

い印象だ。駅からの見晴らしにしろ、敷地をたつぷりとつた付近の家並みといい、環境に不足はなし、と思った。思いながら、このほつとした感じは、おばさんがいる環境に向けてというより、祖母のいる施設と重ね合わせてついできた川西芽李に手渡してやりたい安心感だった。

約束の時間にはまだ三十分以上あった。一階に人影はない。私たちはエレベーターで二階に上がり、施設長の女性に挨拶をし、会場になる部屋を見せてもらった。デイサービスに使っている二部屋の仕切りを取り払っているのだという。アップライトのピアノが壁際にある。電子ピアノが、椅子席に向けて置かれていた。入所者とデイサービスを利用している人たちが加わって、十五人ほどが参加してくれるということだった。

エレベーターが止まり、車椅子の人が付き添われて部屋に入ってきた。私は、おばさんの部屋に挨拶するのは後にする、と施設長に伝えた。椅子が埋まるまでの時間、BGMのつもりでピアノを弾いた。「カノン」や「エリーゼのために」から始め、子供の発表会で人気のある小品や童謡を並べた。しばらくたって横に立っていた川西芽李が「センセ」と知らせてくれた。ほぼ椅子が埋まった合図だ。私はがらりと雰囲気をかえ、演歌を派手なアレンジでメドレーにした曲を弾いた。立ち上がると拍手が迎えてくれた。

マイクを手川西芽李と並んだ。「先生、あそこ」と顔を向けた先に、胸のあたりでしきりに手を振る人がいる。そばに立つエプロンをつけた職員が、こちらを見て頷いた。私は正面に向いてお辞儀

をしてからおばさんに目礼をした。私が先に自己紹介をし、続いて川西芽李が名前を言った。部屋の空気にさざ波がたった。

「メリさんやて」

「かいらしい名あやな」

「とし、なんぼやろ」

端のおばあさんが「メリさんのひつじ」と歌いだした。声を合わせて手拍子をする人もいる。思いがけない展開に、どうしたものかと一瞬まよう私に、「センセ、伴奏して」と小声がし、マイクを持った彼女が「メリさんの羊」を歌いだした。短い歌だ。終りのタイミングをどう合わせようかと体を振ってみるが、彼女はマイクを放さない。二番からはメロディーに乗せ替え歌にしている。私たちがどこから来たか、おばさんを訪ねてきたこと、自分の祖母のこと、私が彼女の先生であること、ボブの足がどれだけ短いか、と陽気に歌うと、突然、ボブが虐待を受けた保護犬だと話し始めた。私は急いで、暗く重い短調で、メリさんの羊を弾く。最後は「メリさんのヒツジ」ボブさんのヒツジ」と歌い終えた。

拍手があつた。彼女は深ぶかとお辞儀をし、私も彼女に習った。頭を上げ際に私に向けた顔は紅潮して笑っていた。私はMCを続けるよう手もとで促した。

そのあとは、大まかに打ち合わせていた順に進んだ。川西芽李が「くるみ割り人形」の「金平糖の踊り」をヴィブラフォンに変換した電気ピアノで弾いたのが好評だった。「ふるさと」を皆で歌うころには、予定の三十分が過ぎていた。

私は施設長にマイクを渡し、後ろに控えた。施設長はよく通る声で「一階の食堂にケーキと飲み物を用意していますので、皆さん、移動しましょう」と、ささやかな音楽会を閉じてくれた。私たちは施設長の配慮で、三階のおばさんの部屋にあがって、一緒にお茶をすることになった。

車椅子にちんまりと納まり、人の成すがままに委ねているように見えていたおばさんだったが、介護のひとが離れると、敏捷に車椅子を操ってエレベーターに乗り、私たちを部屋に案内してくれた。ベッドと小ぶりの整理箆筒が壁際にあつた。その前に小さなテーブルと丸椅子が二つ並んでいるのが見えた。室内はそれでいっぱいだった。車椅子を出入口の壁に寄せて横づけにしたおばさんは、慣れた手つきで手摺を伝い、ベッドのへりに腰を掛けた。

私は月並みな挨拶をし、運ばれてきたコーヒーとケーキに手をのばした。話の接ぎ穂が見つけられない。駅からここまで来る途中の住宅の路端に曼珠沙華が咲いていたと話した。おばさんはにこやかに「そうやな、ほんまに」と言うばかりだ。川西芽李は疲れたのか黙ってケーキを食べている。

遅ればせながら私は気がついていて、おばさんが心に刻んでいるピアノの上手な子と言うのは、姉なのだ。兄が死んだ年の夏休み、おばさんの庭で、七歳の妹の口から繰りだされたのは、姉のピアノへの称賛だった。アイスクリームを頬張りながら、おばさんを姉と兄の世界に誘った妹は、まだピアノを習ってはいなかった。

おばさんは今、姉だと思えば違えている私の背後に、ふたごのよう

な兄の姿を認め、兄の存在は、同じ日に火に巻かれて死んだ友人の思いでも繋がっている。

おばさんの視線は私の顔をさまよっていた。私はその視線を避けて立ちあがった。おばさんの誤解を解くことも、そのまま引き受けることも、できなかった。

「おばさん、疲れたのかもしれない」と私は川西芽李に言って、手みやげの菓子を置き、帰りの挨拶をした。おばさんは私たちの手をとって、何度も「よう来てくれた、おおきにな」と繰り返し返した。

帰りは施設の人がJRの駅まで車で送ってくれた。

川西芽李は、私の前の席で眠っている。山の中を走っていた電車は、短いトンネルを二つ抜けてから風景を変えた。畑や稲刈りの終わった田んぼ、曼珠沙華の群生がみられた。集落が目立つようになり、山からしだいに遠ざかっていくのがわかった。

少女の頬に陽が掛かるうとして、起こさないように、そっとシェードを下げた。おばさんを訪ねることは、もうしないだろうと思つた。